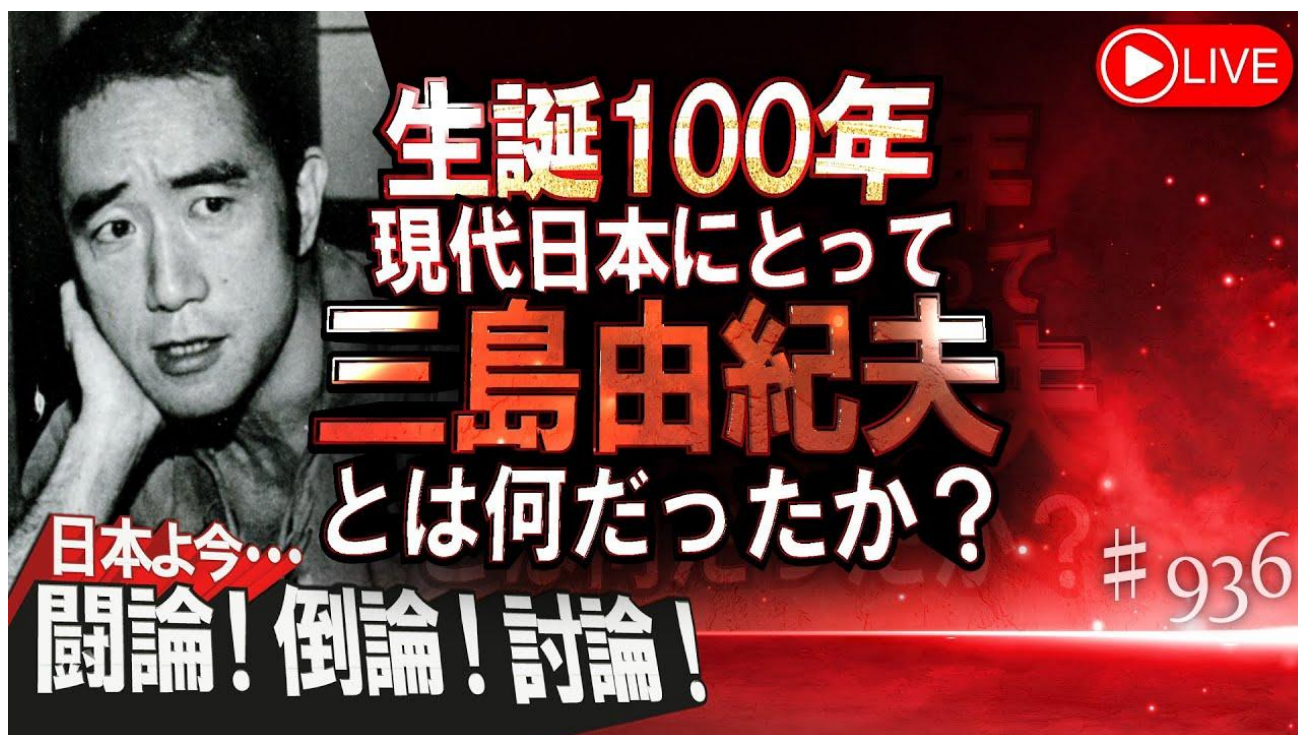




日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第936回
生誕100年

現代日本にとって三島由紀夫とは何だったか？

R7/11/18

パネリスト：

浅野正美（三島由紀夫研究会 代表副幹事）
澤村修治（編集者・松蔭大学教授）
執行草舟（実業家・著述家・歌人）
富岡幸一郎（文芸評論家・関東学院大学教授）
三浦小太郎（評論家）
宮崎正弘（作家・評論家）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は。

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第936回目の討論です。間もなく11月25日が来ますけれども、毎年、ほぼ、やっているんですけれども『生誕100年、現代日本にとって三島由紀夫という存在は何だったのか？』といった題名で、今日は、見識をお持ちの皆さんにお集まり戴いて議論してみたいと思います。

今でも我々の中に生き続けている三島由紀夫という存在、文学でも、或いは現実の世界、日本の現在も、また大きな影響を与え続けているということでもあります。そういう意味で今日は皆さんの忌憚のない突っ込んだ話を伺えればと思っておりますので、宜しくお願い

します。それでは出席の皆さんをご紹介します。まず、作家で評論家の宮崎正弘さんです」

宮崎「はい」

水島「宜しくお願いします。そして、今回、初めてご出演、戴きます。三島由紀夫研究会代表副幹事、浅野正美さんです。宜しくお願いします」

浅野「はい。宜しくお願いします」

水島「実業家で著述家、歌人であります執行早舟さんです。宜しくお願いします」

執行「宜しくお願いします」

水島「文芸評論家で関東学院大学教授の富岡幸一郎さんです。宜しくお願いします」

富岡「宜しくお願いします」

水島「評論家の三浦小太郎さんです。宜しくお願いします」

三浦「宜しくお願いします」

水島「そして編集者で松蔭大学教授の澤村修治さんです。宜しくお願いします」

澤村「宜しくお願いします」

水島「今日は、このメンバーでお送り致します。丁度、こういう形で、『豊饒の海』じゃないですけど、月を背景に、これ、本当はずうっと満月のままにしようと思ったんですけど、こういう動画があるよっていうことで、こっちの方に段々欠けて来たり、増えて来たりとか、月をバックにしようと思います。はい。

というようなことですが、皆さん、それぞれ、語りに語ったら1時間でも2時間でも、お話し戴ける皆さんですけど、今の時代にとって、三島由紀夫という人物、或いは、存在は、皆さんにとって、どんな形に今、なっているのか。まずは簡単に御見解を戴いてから議論に入ってみたいと思うんですけども、じゃあ、宮崎さんからお願いします」

宮崎「今年は三島由紀夫生誕100年で色んな催しがあってね」

水島「はい」

宮崎「我々も主催したんですけども、実は、これは日本だけじゃなくて世界中で行われるんですよ」

水島「はい」

宮崎「それで秋山駿が、死後も成長する作家だと言ったんだけど」

水島「ああ」

宮崎「全くその通りじゃないですか。この55年で物凄く広がっちゃったんだよね」

水島「はい」

宮崎「それでね、ミラノでも今、憂国忌をやるらしいんですけどもね。この間もイタリアから取材陣が来ましてね」

水島「うん」

宮崎「イタリアで三島ブームっていうのは、未だ未だ凄いつて言うんですよ。それで一冊、貰ったんだけど、これがね、三島由紀夫評論集。イタリア語なんだよね。こんなのは何冊も出ている訳だよ」

水島「ああ」

宮崎「それでね、今月の中央公論ですけども、井上隆史さんが書いているんだけどね、ハンガリーとイタリアとスペインかな」

水島「はい」

宮崎「周って来て、特にハンガリーが凄いつて言うんですけどもね、このイタリアも凄いいし、ハンガリーも凄いいし、スペインも凄いいんですがね、忘れてるのは、セルビアですよ。セルビアって何処にあるのって（苦笑）元ユーゴスラビアの方です。セルビアってい

うのはね、1千万人ぐらい人口が居るんですよ。あのボスニア、ヘルツゴビナとか、あの辺、全部、そうでね。それでね、指導者のラドバン・カラジッチ（Radovan Karadžić）っていうのが捕まってね」

水島「はい」

宮崎「今、終身刑で監獄に入っているんだけど、弟が面会に行ったんですよ」

水島「はい」

宮崎「その時にメッセージをくれたの。それが何だって言ったら、三島由紀夫の詩なんですよ」

一同「ああ～

宮崎「それでねえ、やっぱり浪漫派って言うかね、何かそういう共通するものがあるんだよね」

水島「なるほどね」

宮崎「全部ね。そういうことを思ったりして、とにかく三島さんの影響力というのは日本だけじゃないと。世界中に今、広がっているなあっていうのが、私の今の感想ですね」

水島「まあ、変な言い方だけど、どの辺が支持されているんですかねえ」

宮崎「いや、それは国によって全然、違うんだ」

水島「ああ、違うんですか」

宮崎「例えば、フランスはアモーレの世界だしね」

水島「ああ」

宮崎「ドイツに行ったら、もう、ただの論理的なもので、政治的なものは全然、翻訳されていない」

水島「なるほど」

宮崎「イタリアへ行ったら、盾の会のこととか、小さな檄文から何から全てが翻訳されている」

水島「なるほどねえ」

宮崎「勿論、文学もそうだけどね」

水島「はい」

宮崎「それで事件の直後に、あれだけ三島を罵っていた中国ですら、主要作品は今、全部、翻訳されているんだ」

水島「なるほどね」

宮崎「どれぐらい誤訳があるのか一々チェックしておりませんけどもね。相当、誤訳もあるだろうけど、そんな現状ですよ」

水島「なるほどね。死後も成長というね。はい。では浅野さん、お願いします」

浅野「はい。ここ5～6年、特に感じることですけれども、若い人達にとって三島がタブーではなくなったということですね。我々の世代にとって三島というのは、ある一つの危険人物視されていたんですけど、そういった偏見が全く無く、純粋に三島に触れている若い人達が増えて来たことを非常に感じています。

これは三島の政治的な主張だけではなく、文学が持っている日本古典からの連続性を備えた本物としての文学を若者が素直に評価しているということで、三島さんが生前に自分のことは50年か100年経たないと理解されないという風におっしゃっていましたが、正に亡くなって50年経って生まれて100年経って、三島を理解する若い人達が本当に、沢山、増えて来た。これは裾野が非常に広いので、これからも、ずっと続いていく現象じゃないかなあという風に感じています」

水島「なるほどねえ。三島先生の場合、色々と、まあ、あまり討論で先生と言うとあれで

すけど、まあ、小説や評論と…」

浅野「はい」

水島「或いは政治的な行動とか色んな発言ですね」

浅野「ええ」

水島「どの辺が今、若い人に受けている訳ですか」

浅野「若い人が今、一番、読んでいるのは、やっぱり文学作品で特に小説が多いですね」

水島「ああ。どの辺の小説が一番、人気がありそうですか」

浅野「『豊饒の海』が凄く読まれているんですよ」

水島「『豊饒の海』が読まれている、ふう～ん」

浅野「ええ。文学の好きな若者にとって『豊饒の海』というのが、一つの必読書になっている傾向がありますね。あれを読めたか読めなかったということが、ひとつの自分のハードル、シンボルになるような…」

水島「ああ、なるほどね、一部とか二部だけじゃなくて四部まで読んでいるんですか」

浅野「はい、そうです」

水島「ああ、そうですか」

浅野「勿論、色んな意見があるんですよ」

水島「凄いですねえ」

浅野「三部で挫折したっていう方も勿論、沢山、居ますけど」

水島「三部と四部あたりは読むと結構、難しいっていう感じするから（笑）」

浅野「難しいですよ」

水島「ああ、そうですか。なるほど。はい、有難うございます。それでは執行さん、お願いします」

執行「僕はねえ、文学が凄く好きで、ずうっと若い頃から来た人間けども、今の時代というのは、やっぱり割と世界的に文学が確実に衰退していますよね」

水島「はい、そうですね」

執行「このねえ、文学が衰退したこと、僕は一番、悲しいんだけども、その中にあって、やっぱりねえ、三島由紀夫っていうのはねえ、若い人が本当に、みんな、今、浅野先生もおっしゃっていたけども、みんなが格好いいって言うんですよ」

水島「うん」

執行「この格好いいという表現が、文学に対してとられる。これが、やっぱり僕はねえ、三島先生のこれからの世界を覆う思想の一つの基盤になって行くと思うの。僕は、もう、基本、若い高校生の時に縁があって三島先生と文学論をさせて戴いたんですが…」

水島「はい」

執行「僕はね、当時から、ずっと考えていてね、この生誕100年に来て特に一番、考えるのは三島先生の発言、それから文学、書物、全てが僕は、まあ、大きい言い方をしちゃうと人類。それから縮めたとしても、日本民族のこれからの本当の生き方を示す、これ無くしては、やっぱり人類の未来が本当に危ういんじゃないかと言われるような、本当の予言だと、僕は思って、最近、その文学を全部、読んでいるんです。だから預言者であり、何て言うのかな、預言者であり、その神話の作り手で…」

水島「うん」

執行「僕は三島先生の義挙というのを、僕が自分の立場から見た場合、あれは三島先生の最後の文学であり、そして、自分の文学と思想を将来に対して、神話として残す為の先生の決意」

水島「うん」

執行「僕は、そういう風に文学論を通して、ずうっと感じています。それが今の見方ですね」

水島「そうですねえ。だから、今、おっしゃったように、戦後は、ずう～っと政治と文学とか、芸術と社会とかね、こういう二元論的な形で語られている中で、最後に文学と実人生を一致させちゃったみたいなの、そういう感じも受けるところがあるんですけどね」

執行「そうですね」

水島「はい、解りました。じゃあ、続いて富岡さん、お願いします」

富岡「はい。執行草舟さんが今度『永遠の三島由紀夫』出されて、私も短い解説を寄せさせて戴いたんですけども、今、おっしゃったように三島由紀夫という存在が、やはり、一つの預言者ということ、まあ、これは後程、執行さんからお話があると思いますけど、三島さんは執行さんが高校生の頃に直接、出会われて…」

執行「はい、そうですね」

富岡「丁度、昭和41年ですよ」

執行「そうです」

富岡「ですから三島由紀夫が『豊饒の海』の第二巻『奔馬』に取り掛かろうかという時、それから41年というのは、今日、持って来ましたが『英霊の聲』という三島由紀夫にとって非常に大きな転機になる作品を書かれる。そして、大神神社に行き熊本に行き神風連の取材をする。

それから、その年に林房雄と『対話・日本人論』という対談をしています。そして、やがて『楯の会』が結成されて行くという。つまり、三島が正に死に至る行動と、最後のライフワークに向かう非常に重要な41年に、執行さんが出会われて、その時、交わされた全ての三島先生の言葉が今回、この本に出ているので、これは正直、仰天しました。

ある意味、今迄の三島研究に相当な修正と言ったら変かもしれませんが、新しい解釈を齎すだろう画期的本であると思います」

水島「そうですね」

富岡「ただ、残念ながら、日本の文芸ジャーナリズム、或いは、勿論、心ある三島研究者は読んでいらっしゃると思うんですけども、まだまだ、この永遠の三島由紀夫の価値と言うか、秘めている正に非常な革命的な本であるということが、まだまだ伝わっていないんじゃないかなって正直、思っています。

逆に言うと、今の日本の文学界が非常に狭くなって、三島由紀夫については勿論、論じている小説家でも若手、若手でもないかな、中堅の平野啓一郎さんとかいらっしゃるんですけど。ただ、こういう『永遠の三島由紀夫』のような本を日本の文壇が直接、取り上げるのを避けているというところに、やっぱり日本の今の文芸だけじゃないですけど、論壇も含めたジャーナリズムの狭さっていうのを非常に感じています。

三島さん自身の事で言えば、さっき宮崎さんがおっしゃったように本当に『成長する作家』というか、どんどん世界に広がっているし、それからジャンルを超えていると思うんですね。三島さん自身が小説、評論、戯曲をお書きになっていますけれども、芝居、戯曲は本当に世界中で上演されています。

例えばバレエでも、モーリス・ベジャール (Maurice Béjart) が、ああいうのをやったりウィリアム・フォーサイス (William Forsythe) というフランクフルト・バレエ団、前衛バレエ団が『豊饒の海』を取り上げたりしています。或いは、私の知人ですが笠井勲さんという舞踏家ですけども、これは『暗黒舞踏』の土方巽さんの系譜ですけども、笠井勲さんが『英霊の聲』を舞踏で舞ったんですね。私は何年か前に、これを観て雷に打たれたような衝撃を受けました。

だから活字が色々な身体の世界に広がっているという、やはり、この辺が三島由紀夫のエネルギーが今、本当に出ていないんじゃないか。恐らく明治以降の近代の文学で、川端康成とか谷崎潤一郎とか漱石とか鴎外とか、勿論、居ますけれども、何か全く違う存在として三島由紀夫は蘇っているし、広がっているかなって改めて、そういうことを感じていますね」

水島「うん。そうですね」

富岡「うん」

水島「実は、私が、そこら辺のところに、三島由紀夫という存在に凄く関心があるところですね」

富岡「はい」

水島「はい、有難うございます。では三浦小太郎さん、お願いします」

三浦「私は三島由紀夫という方に対してちゃんと考えるようになったのは、本音を言いますと、この数年ですね。本当にそうです。それまでは、ざあっとは読んでいたけど、あまり真面目に考えて来なかったですよ。何故、この数年、やはり、ちゃんと読み直さなくちゃいけない、未読のものを読まなくちゃいけないと思ったかと言うと、やっぱり今の世界を理解する、もしくは今の世界の先を考える上で読まなくてはいけない作家の一人だなと思ったからです」

水島「うん」

三浦「さっき宮崎先生が大変、重要な事をおっしゃいましたけど、イタリアで非常に読まれている。まあ、ちょっと抽象的なことかもしれませんが、三島由紀夫が非常に愛したイタリアの作家の一人であるガブリエーレ・ダンヌンツィオ（Gabriele d'Annunzio）ですよ。ある意味、敢えて誤解を恐れずに言えば、あの人はイタリア・ファシズムというものを始めたような人ですよ。逆に言えば戦争で負けて、そしてイタリアというもののアイデンティティ全部が崩壊していく中で、やっぱり行動と文学によってイタリアというものを再興しようとした人。まあ、ちょっと乱暴な言い方していますけどね。

そんな単純じゃないですけど、やっぱり、三島さんは、そのダンヌンツィオを読んで、恐らく何か影響を受けているんだろうと思います。それが今、イタリアにフィードバックしているみたいなことを考えると、やっぱり、これは日本文学という基準で考えるんじゃないくて、一つの世界思想の在り方なんだろうなという気がしますね。

ただ、私は多分、皆様と考えるところでしょうけど、私は三島由紀夫が自決したということに関しては、理解できないことはないような気がしますけど、やっぱり、私は、あの方は80歳まで生きて欲しかったですね。それ以降の日本の色んなことに関して、三島さんでしか書けなかったことが、いっぱいあったと思います。多分、あの方だったらサブカルなんかについても凄く見事に論じたと思うんですよ。だから、私は今でも、もったいなかったと思っています。それが私の本音ですね。

最後に、今日はこういうところ、まあ、こういうって言うと失礼ですけど、今のポリティカルな問題とは直接、関わらないところなので、正直言いますけど、まあ、これ以上は、あまり言わない方がいいんですけど、まあ、言いかかったので言いますけど、私は評価しているし、僕なんか批判してもしようがないくらい高い所に居る人ですけど、私は石原慎太郎とか江藤淳とかが基本的に大嫌いで、あの方々の三島に対する言い分っていうのが凄く嫌だったところがあるんですね。うん」

水島「それは生きている時ですか、死んでいる時ですか」

三浦「まあ、両方ですけど（失笑）、まあ、それは、いいんですけど、いやいや、凄いことをした、江藤淳だって凄い批評家だし、石原慎太郎っていう人も、ある意味、日本の中で

凄く意義のある人だと思っているんですけど、あの方々の三島に対する言説っていうのが、僕は凄く嫌だったですね。本音を言えば左翼の三島批判より嫌だったですね。うん」
富岡「理解したふりをして」

執行「はいはい」

三浦「うん。ああいうのが本当に嫌だったですね。僕は石原慎太郎の三島論っていうのは一冊も読む気にならなかったですよ。と言っても全部、読みましたけどね。本当に、ああいう次元で語っちゃいけない人だろうっていうのが凄くあって、そういう点では、私も含めてですよ、僕も Hanada で三島論を書かせて貰いましたけど、書いていて、もう駄目だ、駄目だ、だったです。編集部にも読者にも本当に悪いんだけど、もう原稿を渡すのが恥ずかしいような状態だったですね。そんな低い次元で保守派が三島さんを旗に使っちゃいけないって、僕は今でも思っています。まあ、そんなことですね」

水島「はい。有難うございます」

三浦「余計なことを言いました」

水島「いえいえ、そんなことはないですから（笑）、言いたい事を言って下さい。じゃあ、澤村さん、お願いします」

澤村「はい。三島さんが亡くなって55年というね、相当の年月だと思います。社会も変わりましたし、取り分け20世紀と21世紀はデジタル文化が進んで、もう何て言うのかなあ、20世紀では常識だったというのが今では通用しなくなったものが随分、あると思っています。それにも拘わらず、この55年の年月を考えると、三島由紀夫って今、非常にアクチュアルになっているんだっていう感じを私は受けます。

私自身は小学生で三島事件を受けた時、小学校5年生ですから、あまり物は解らなかったんですけど、何か大人が非常に物凄い緊張感を持って、あの緊張感の顔っていうのを初めて見たぐらい、何か異様なことが起きたなっていう感じはあったんですよね。

そのあと、長じて日本論なんかに関する本とか、あと西郷隆盛に関する本二冊、一冊は、子供向けの物語ですけど、そういうのを出して、やっぱり、どうしても三島っていうのが何処かで出て来るんですね。それで気になる存在でした。また、それとは違うんですけど中央公論の新社でも旧社でも勤めていたんですが、旧社の時に、実は三島さんに関する本も作っています。その時に嶋中鵬二（しまなかほうじ）会長と色んな話をして、その時に三島事件の事もよく聞きました。

何か、そういう断片が55年で凄く雲散しないですね、それどころか非常にアクチャーな感じになって来ているなっていうのが、まず個人的な思いとしてはあるんです。ただ、そこで個人を離れて別の観点で、そのアクチュアリティっていう話をさせて戴くと、私は、大学で日本文学を教えているんですが、最近の若い世代、これはZ世代ですよ。生まれながらにしてデジタル文化で、紙ベースでどうのこうのっていうのは、もう無い、最初から経ることが出来ない世代ですが、意外に三島の作品を読んでいるんですよね。

私は近代文学も現代文学も、あとは児童文学とかも、みんな、やっていますが今、何を読んでいるのなんて聞くと、三島という固有名詞が出て来るのに、あれっという感じがしています。読まれなくなった近代文学の作家も結構、居るんですよ。よく名前が出て来るのが三島と太宰なんですね。太宰は、まあ、又吉直樹さんの色んな意味の活動があるからなのかもしれませんが、三島というのを結構、聞くので時々、えっと思っています。

私的には三島と太宰は大嫌いだ。顔が嫌いだという、あのエピソードがあるのでちょっとニヤニヤしながら、その話を聞いていたりするんですけどね。そういう生まれながらにしてデジタルがあった世代が、何故、三島なのかっていうのは、先程、宮崎先生がおっしゃられた世界的に再評価されているっていう、世界へ向かうベクトルと、日本国内の縦に

向かうベクトルっていう二つが、一種のアクチュアリティを生んでいるんじゃないかなっていう風に思います。

ですから文学の領域で言うと、今のデジタル文化とは何か繋がりみたいな何かがあるんだと思うんですよ。その何かというのが今、ちょっと色々考えている最中で、それが一つですが、もう一つは、今、議論にもなったんですけど、政治的な意味合いですよ。ここにいらっしゃる方は当然、もうご存じだと思うんですけど、三島さんが死んだ時、あの自決した時は、三島に近い保守派の人達も、もう気が狂ったとしか思えないと。殆どの人は、そう言っていました。多分、政治的には殆ど無効だというようなニュアンスで言ったんだと思いますね。まあ、それは当時の日本を考えると、そうだったのかもしれませんが。

それが55年経って、果たしてそうなのかという、ちょっと変な話だけど、リアル・ポリティックスに関しても、一種のリアリズムを発信して来たんじゃないかなと思っています。これは、ちょっと微妙な観点になるので、皆さんの意見も聞きたいですし、私も何処まで言えるかどうか分らないですけど、例えば『若きサムライのために』っていうのを読むと、今、来る途中でも読んで来たんですけど、要するに日本人の生の衝動、生きる衝動、生きたいという衝動は、戦後社会は、これだけ豊かな国を創ったので、それは、満足させて来たけれども、死の衝動、Deathの死ですね、その衝動はどうするんだっていうことを書いているんですよ。

やっぱり今の国際情勢を巡る日本人は、どうあるべきなのかということを考えると、その死の衝動も包括するようなナショナリズムっていうのは、どうしても論議としては出て来ざるを得ないと思うんですね。三島さんが55年前に亡くなって、その時は周囲から気が狂ったって言われているんですけど、現在、もうリアル・ポリティックスの中でも何らかの解答を示さなきゃいけないテーマっていう形になって来たっていうのは、それも一種のアクチュアリティだと思うんですよ。

ですから個人的にもそうだし、自分の教えている教育の範囲内でも凄く若い人の間のアクチュアリティ。それから政治の世界で、三島さんって最後はインパクトが強かったから、どうしても、それに来て、そこから引き算でね、彼らの思想とか見られるんですけど、私は一回、最後、自決っていうのをね、一回、置いておいた上で、最後の時期のその政治的な発言というのを整理し直した方がいいと、私は今、そう思っているんですね。

何か現代の政治にとって、非常に重要な観点が浮上して来るんじゃないかなっていう感じがします。今日は、そういう議論が出来たら嬉しいなという風に考えております」

水島「なるほどね。はい。有難うございます。今、丁度、澤村さんからも言って貰ったんですけど、つまり絶えず出て来るのは政治の分野のものと文学の事と、或いは、その整合性ということだけど、やっぱり、どうしても避けて通れないっていうかね、それと、もうひとつは、さっき、お二人からも、三浦さんからも出た江藤淳の話ですね。つまり、江藤さんが言ったのは、戦後の日本というのは、所謂、仮想現実の世界だと。

主権も無いし、何も無い。軍隊も無い、三島由紀夫と江藤淳は何も無い社会っていうところは一致していた訳ですよ。でも三島さんが腹を切った。その自決をしたという、ああいう行動について言うと、突然、江藤淳は『ごっこ時代の終わり』って書いている訳ですよ。つまり戦後の日本がなくなるまでというか自決なさるまで、みんな、架空の世界で生きています。『ごっこ』をやっていると。民主主義ごっことか何とかの『ごっこ』とか、それをやっていたのに、はっきり、ここで別れた訳ですよ。

そうすると、江藤さんが何を言ったかと、三浦さんが怒ったのは多分、それだと思うんだけど、あの自決事件自体も『ごっこ』だって、江藤さんが言った訳ですよ」

富岡「楯の会ですね」

水島「ん？」

富岡「楯の会」

水島「だった、まあ、それを今、言った、それを『ごっこ』って、いや、実際、そっちの方ね、今言ったような形で、戦後の認識は似ていたんだけど、あの事件、つまり全共闘時代っていうか、わあわあ騒いだのも終わって、三島由紀夫という人の自衛隊が出るなら俺達も戦う、命懸けでやるって言って、本気でそう思っていた。だから、それが全くこけちゃった。もう私なんか本当にその時代の人間で、68年に大学に入った人間ですから、余計に、そういうものを見ていてね、『ごっこ』というのは解ったけれども、そのあと、このものに対して、三島由紀夫が何故、ああいう形で立ち上がったかっていうのは、あれを『ごっこ』として片付けようとしているのが、はっきり言うと、さっき澤村さんがおっしゃったように馬鹿なことをやった、気が狂っているんじゃないかとかね。

そういう形で自分達は、まあ、気持ちは解るがって、お前らが何を言っているんだというね、三島さんの気持ちは解るがねえ、やっぱり、あれは、ちょっと、やり過ぎだよって、こんな体で、今、全く同じ。今の日本の現状と同じことをやっている。我々は、この姿を突きつけられているって言うかね、あの年以来というようなことがあってね、それと、今言った様に日本の政治と、或いは、文学や芸術っていうものの対立っていう、或いは、私小説というので誤魔化して来たっていうね、まあ、誤魔化してはいけないな、繋げて来たっていうのはあるけども、三島由紀夫の文学は、それとは全く対立的な形だったってことを考えた時、やっぱり今、何故、それが世界中にね、宮崎さんがおっしゃるように、ウケるっていうか、受け入れ始められている。

つまり理解され始めているって、これは政治的な行動なのかどうなのか、その辺は判らないところもあるけれども、少なくとも各国で三島由紀夫という存在が、この問題について真正面から命懸けで引き受けて、命かけて、命も投げ出しても問題提起しているっていうところは、やっぱり大事な事だと思うんでね。

この辺の、やっぱり今迄、戦後の保守系も、左翼系も誤魔化して来たことについて、やっぱり今でも未だ続いているという気がしてしましてね、この辺のところで、そういう問題は提起されているんじゃないかっていうね、それで今、若い人に受け入れられているのも、この欺瞞の世界、仮想現実の世界を嫌だって言う人達が増えているんじゃないかという気がするんですけど、皆さんの意見を聞きたいんですけどね。宮崎さんはどうですか」

宮崎「まあ、二つあるんだけどね、一つは、今、江藤淳と石原慎太郎の批判が出たので、ついでに言っておきますけどね、私の『あの人の死にかた』っていう本の中で、江藤淳と石原慎太郎のことも書いているんだけど、江藤淳は何しろね、突然『南洲残影』を書いて変わるんですよ」

水島「そう」

宮崎「物凄く三島に接近しちゃうのね。三島さんも最後に上野公園の西郷像を見上げてね、私は今まで貴方がこれ程、偉い人だったと気が付かなかったって言っているんだけどね。(笑)」

水島「(笑)」

宮崎「それでね、江藤淳はね、実は憂国忌の25年の時だったかな、突然、発起人に入って来たんだよ。毎年1万円、カンパをくれるんですよ。それでねえ、ええ～っ、江藤淳って変わったなあって、それは私の感想」

水島「はい」

宮崎「石原さんに付いてはね、三島さんに対する嫉妬が激しくて、それでねえ、4年ぐらい青嵐会のことで濃密に付き合ったんですけどね。ある時、宮崎、お前は何だ、憂国忌の

責任者らしいじゃないかと（失笑）」

水島「(笑)」

宮崎「三島由紀夫を神と思っているのかってね、こう叩き込むように言われてね（苦笑）それでプツンになって付き合わなくなったんですけど（苦笑）」

水島「ああ、そうなんですか」

宮崎「それで二番目の問題。澤村さんが定義した今の若いデジタル世代ね」

水島「うん」

宮崎「ふと思った訳ですよ。今、世界中がやっていることは、何ですか。生成A I、チャットG P T」

水島「うん」

宮崎「それで、今、チャットG P Tで小説を書いたら文学賞を貰ったとかね（笑）」

一同「(苦笑)」

宮崎「そこで、はたと思ったんだよ。村上春樹だの平野啓一郎だのは、チャットG P Tで偽物を作れますよ」

水島「はい」

宮崎「でも三島由紀夫は作れないだろうと思うのね。ボキャブラリーが違うからね。ということは今、思ったんですよ。ちょっと本筋から外れちゃったけど（笑）」

水島「いやいや、もう、チャットG P Tの話は全部、出てきますよ」

宮崎「うん」

水島「今ね、A I、まあ、私もそんなに詳しくないけど、音楽とか、ああいうのが、実は洋物はねえ、相当、コンピュータの中に凄く入れ込んでいるんですよ」

宮崎「いや、音楽はねえ、97%、どっちが作ったのか判らないところまで今、来ちゃった訳です」

水島「いやいや、そうなんだ」

宮崎「(笑)」

水島「ところが、それで言葉も日本語とかは未だ完全に取り込んでいないってことだね、でも、もう時間の問題じゃないかと。それと、もうひとつは、この間、一番、解り易いのは、私が尖閣諸島の歌の作詞をして、川口マーン恵美さんに作曲して貰って、Saya が歌ってC D化しているのがあるんだけど、この歌をポピュラーっぽい、もっと解り易い曲にしようということで、歌詞を入れ込んでやるとね、必ず、チャンチャカチャンチャン、チャンチャンといって全部、中国音楽風になる訳」

宮崎「うん」

水島「違う、これは違うって、もっとポピュラーな日本の抒情歌だと教えても、チャンチャカチャンチャン。つまり完全にA Iが中国の影響下にあるっていうね。だから恐ろしい話でねえ、知らない間になっているっていうことだけは、敢えて、ちょっとね、だから三島先生の文章だって、評論と発言と、それこそ、こういう本まで全部、入れ込んで、それで生の声がありますから、そうすると3 Dで三島先生が、この問題について今の高市内閣はどうですかって聞いたら、答える様なものが出てくる可能性が本当にある。今、本当にそのぐらいです」

執行「それは、できると思いますよ」

水島「う〜ん、やばい世界です」

執行「もう時間の問題ですよ」

水島「そうですね」

執行「う〜ん」

水島「だから、これも対処を考えなきゃいけないですけどね。はい、ちょっとねえ…」

執行「あのう…」

水島「はい、どうぞ」

執行「やっぱり三島先生ぐらい文献が残っているとね、もう、これからのチャットGPTじゃないけど、生成AIだったら何でも作れちゃいますね」

水島「うん」

執行「だから、そういう意味じゃ、凄く怖いですよ」

水島「そうですね」

執行「でもねえ、先程から皆さんがおっしゃっていたことで一番、共通しているのはね、やっぱり三島文学の復活っていうか再生だと思うんですけど、これはねえ、僕は、さっき言ったけど、この50年間、三島先生が亡くなってから55年間、聞いて来た話は時代と共にどんどん増えているのは、人間の一番、深い所から出て来る、格好いいということです。これは、もう問答無用ですよ」

だから何もかも理屈ばかりの社会じゃないですか。これは、日本だけじゃないですよ。日本も理屈ばかりですけども、勿論、アメリカもそう。それによって、みんなの分断が起きているけれども、そこでトランプなんかも出て来る訳ですよ。

でも、そういう社会はドイツもフランスも移民政策ひとつ出来ないような、つまり、移民政策をどうしてやれないかと言えば、あれは理屈で考えているからですよ。だから僕は、世界の若者はねえ、理屈を寸断する様な、人間の文化の何か底辺、腹の底って昔、言いましたよね、腹の底から出るような思想。腹の底から出る様な行動。やはり僕は、これを絶対に世界中の若者が徐々に気が付かなくても望んで来たんだと思うんです。これは世界中の今の政治状況を見ていれば解りますよね」

水島「うん」

執行「そこに僕は、やっぱり三島先生が、いいとか悪いじゃなくて、結局、自分の文学の最終形態として、やっぱり自分の命を憂国の為に投げ出したという、もう理屈はどうでもいい訳ですよ」

水島「うん」

執行「やっぱり自分を投げ出して国家に、国体って言うか国家に対して、正式に抗議をしたなんていう人は居ませんから」

水島「うん」

執行「やっぱり、こういう人の、これによって、僕は三島先生が持っていた全ての文学、全ての文学に血液が回って、僕なんかが、僕は、もう小学生の頃から三島文学が好きで、読み込んでいたんですが、三島先生と会った高校生の頃には、三島文学論を凄く生意気に言っていたんですけども、あの三島先生の事件以降、読み方が全く変わりましたから」

水島「うん」

執行「何故、変わるかって言うと、やっぱり最後の、あの最終文学、やっぱり自分の身を投げ捨てるという…」

水島「うんうん」

執行「やっぱり、あれが出来るか出来ないかっていうのは、僕は今後の世界をリードしていく芸術。だから文学だけじゃないですよ。政治家も含めて政治家とか文学者に一番、求められるのは、自分の命を投げ出す訴え、行動、それから芸術にしても、自分の命を投げ出すような、こう燃える様な情念から来る芸術が、僕は、これから人類を導いていくものになり、何か今の若者が本当に何か腹の底で求めているもの、そこと三島文学が今、共振しているんだと間違いなく思いますね。はい」

水島「富岡さんはどうですか、はい」

富岡「いや、腹を切ったからですよ」

執行「ね、要は。はい」

富岡「本当にそう思います。だから、さっき三浦さんがね、まあ、確かにねえ、三島先生が80迄、生きていたら何を語ったのかって」

執行「それ、一理、ありますけど」

富岡「でもねえ、僕自身も中学1年でしたから、やっぱり、あの市ヶ谷の自決」

執行「うん」

富岡「腹切り」

執行「はい」

富岡「それが無ければ、そもそも私は、ここに居ませんから」

執行「まあ、そうですね（失笑）」

富岡「他のこと、野球をやったかったんで」

執行「ええ」

富岡「本なんて読まなかったんですけどね」

執行「僕も三島文学の大ファンだから、とにかく三浦さんがさっき言われた様に、三島先生が、こう、あれね、本当に残念ですよ」

富岡「うん」

執行「やっぱり死なれた頃は、特にそう思っていました。でも段々、年月と共にね…」

富岡「そう。村松英子さんが森田を…」

執行「言っていましたね（苦笑）」

富岡「森田正勝は嫌いって言っているのは…」

執行「嫌いだって言っていた（苦笑）」

富岡「生きていて下されば、もっと、もっと…」

執行「でも、それも解るんです」

富岡「それ、解りますよね」

執行「三島ファンの人は、みんな、そうですよ。うん」

宮崎「映っている？」

執行「『森田正勝は何故、腹を切ったのか？』

宮崎「映った？あのねえ、これは25回も連載されているのにね（笑）、未だに何故、腹を切ったかっていうところまで行かないっていうね（苦笑）」

執行「ああ～」

宮崎「いや、ただね、やっぱりねえ、私にとっての衝撃はね、むしろ三島さんはああいうことをやるだろうなあっていうのは予想が付いていたんだけどね」

執行「予測はね」

宮崎「森田まで一緒に死んじゃったことの方がショックだったね」

執行「はい」

宮崎「ええ。3年間、一緒に暮らした訳ですから」

執行「う～ん、でも、それは、やはり、あれじゃないですか、若者に対する感化力の原点になっているんじゃないですか」

宮崎「そうそう、そう」

執行「やっぱり、その当時の若者の代表が森田さんですよ」

宮崎「うん」

執行「だから、やっぱり一緒に死ぬだけ、そのう、森田さんのことをどうこうって言う人

は勿論、多いですけど、やっぱり尊敬している文学者も多しと言えども、一緒に死のうっというのはねえ、やっぱり普通じゃないですよ」

宮崎「うん」

執行「でも、やっぱり三島由紀夫が持っていた魅力ですよ。これが今、復活していると思いますね」

水島「うん…」

執行「また、ここにも書いたんですけども、本当にそういうものが復活しないと、僕は、人類って言うかなあ、この民主主義。今、民主主義も理屈の上に理屈をこねて、何一つ、出来ないような一種の滅びに向っているような、そういうものに対する凄い憤りが若者の中にも出ている。やはり、そこに必ず三島先生の作品が、原動力に火を点けるんだと」

水島「うん」

執行「僕は、そう感じますね。う～ん」

富岡「この間、戸嶋さんの美術館に伺って、あの戸嶋靖昌」

執行「ああ、僕がやっているところね、はい」

富岡「執行さんの美術館に、月山という名刀が展示されていたことがあって」

執行「大好き」

富岡「その時に、執行さんがお書きになっていた解説でね、日本刀というのは、人を切る道具ではなくて、自分の腹を切るものだ。だから美しいって書かれていて、目から鱗でした。そんな、解説を書いている美術館は何処にも無いです」

執行「うん。でも、そうです」

富岡「だから確かにそうですよ。つまり人を切る為に、あんな刀は必要ないですよ」

執行「世界の武器で、あそこまで研ぎあげているのは日本の刀だけですから」

富岡「うん」

執行「人を切る為に、あそこまで綺麗にする必要は無いんです。うん」

富岡「だから、それは『葉隠れ』もそうですけれども…」

執行「はい。『葉隠れ』ね、はい」

富岡「やっぱり切腹」

執行「はい」

富岡「そして介錯という、私も中学生でしたけど、その衝撃たるや凄いものがあって、あれは同世代の思想的には新左翼であった吉本隆明がね、やはり凄く衝撃を受けてね」

執行「はいはい、はい」

富岡「色々言っている奴は居るけど、この腹切り、首撥ね、この衝撃は必ず、その内、若い世代が引き取って大きな力になるって言っていましたね」

執行「そうですねえ。あの吉本隆明が言っている訳ですから」

富岡「言っていましたね」

執行「う～ん。左翼の代表ですからねえ」

富岡「うん。畳の上で、いくら言論を言っても畳の上で死んでいく豚ロース的な戦後知識人には真似出来ないって言っていますよ」

執行「小林秀雄も同じようなことを言っていましたよね」

富岡「言っています」

執行「うん。色んなことを言うけど、俺は何も言わんということだね。あれだけのことが出来る人は居ないというようなことを言っていましたよ」

富岡「だから、そういう意味では…」

水島「だから、ねえ、そういう意味では江藤さんと対極的なのが小林さんでねえ」

執行「はい」

水島「あと、まあ、そうですねえ。あの時代で私達が一番、考えるのは、何故、71年でしたっけ」

富岡「70年」

執行「70年」

水島「70年、そうか、そうか。70年で丁度、全共闘が終わってね、全共闘がわあ〜っと言うのが終わって、大騒ぎが終わって、あの時、三島さんが言ったと思うんですけど、機動隊が押し寄せたら安田講堂から一人一人が飛び降りれば、日本の民主主義なんていうのは柔いものだから直ぐ引き揚げちゃうと」

執行「うん」

水島「でも飛び降りる奴は一人も居なかった。一人も居なかったの、みんな、捕まって出て来たんだけど、そのあと、三島由紀夫の自決事件があったあと、今度は色々と過激になって、赤軍の何かとか色々起きたじゃないですか。起きた時、私は、あさま山荘もみんなそうだったけれども、実は捕まるんじゃないかと自決するんじゃないかと思っていた」

執行「うん」

水島「銃で警官を撃ち殺していたでしょ。3名ぐらい。だから必ずやと思っていたら、ああ、左翼も、そういうことをやるのかなあと思ったら、捕まって出て来ただけ。もう、これは本当に、さっき言ったね、まあ、我々はそういう世代だったから、あれだけ見ていると全部が、みんな、『ごっこ』だったと。一番、孤立して、孤独で戦って、自分でそういうのを見せたのが三島由紀夫だったっていうかね。やっぱり頭のいい方だから、腹を切ったということ自体、別に自衛隊が立ち上がるとは全く思っていなかったと思う」

執行「うん、思っていないですねえ」

水島「だけど、それでも、あと30分、待つとか何かっていう最後の希望、希望を言って、やっぱり亡くなっていった。つまり、どいつもこいつも極左から、いや、全共闘との対話なんてやっているじゃないですか。私はあとでも見たし、本でも読んだけど、この三島由紀夫という人は優しい男だなあと。こんな連中にね、と思ったぐらいでね、つまり日本の左翼とかそういうのに期待し過ぎたっていうかね、禄でもない奴ばかりだった。もっと言えば、あの当時の日本の保守だって、禄でもない奴ばかりだった。だから、あそこまで独りぼっちになって追い詰められて、自決せざるを得なくなったんじゃないかと。最後まで日本の極左の連中も、あの体たらく見せて滅びていった。それで今、見たら『のっぺりした無機質な』状態が生まれちゃっているっていう感じがするんですけどね。浅野さん、そこら辺はどうですか」

浅野「うん。まず、一つは江藤淳と、それから石原慎太郎が嫉妬っているのは間違いないと思うんですけども、あの時に正しく三島さんを評価していた文学者と言うと、先程、出て来た小林秀雄と共に、川端さんは間違いなく三島さんの評価は正しくて」

水島「ああ、そうですね。はい」

浅野「もう一人は、ちょっと意外かもしれないんですけど、北杜夫が一切、批判をしていなくて、非常に高い評価をしていましたね。ここは、私は正しい評価が出来た3人の文学者じゃないかなあという風に思っています。その命を懸けたということに関しては、これは、もう、やはり三島さんじゃなければ出来なかったことであろうし、そのあとに続く人も居なかった訳ですけど、ただ三島さんが一番、言っている大事なことは『有効性は問題ではない。あとに続くを信ず』と言ったんですね。その『あとに続くを信ず』の言葉が今、やっと蘇って来たんじゃないかなあと思っています。簡単ですが、そのように思っております」

水島「うん。澤村さん、いかがですか」

澤村「ええ。さっき執行さんが『恰好いい』という言い方を為されましたよね。三島さんは『行動学入門』の中で、こう書いているんですよ。『その内、反革命が恰好いい時代が来る』とね。その時は革命が恰好良かったんですよ。体制を倒して、どうのこうのって。それで『反革命が格好いい』っていうのは、ん？っていう感じだったんですけど、やっぱり時代が変わって来て、現代的な視点から見ると、トランプ現象とか欧州の保守派の台頭とかね、今の話ですよ。現代。

それから何と言っても先の参院選で、所謂、改革派保守が伸長して、日本政治の現場で一定の存在感を示すようになった。これはねえ、戦後の政治を考えると凄いことですよ。つまり昭和27年だったかなあ、あの岸が自分達のグループを出馬させて、総選挙を打って出た訳ですが、自民党への右の勢力でね。それでも一人も当選せず惨敗したんですよ。あれ以降、自民党への右っていうのが継続的な力になるっていうのは、あまり考えられなかった訳ですよ。だから岸さんは自民党に入って、保守民主勢力を形成していったという歴史があるんですけど。そのあと太陽の党かな。次世代の党とか色々あったんですけど、やっぱり消滅しましたよね。それが今、これから、どうなるか判りませんが、改革派保守っていうことで、一定の地歩を占めているように思います。

これはねえ、かなり大きな出来事だったんじゃないかなと思っています。それを考えると、もしかしたら反革命は恰好いいんだと。あの時は多分、ええっなんて思われて、正に気が狂っているのって思われたかもしれないですけど、それが、もしかしたら格好いいことなんだっていう、まあ、三島さんっていうのはねえ、ちょっと怒られるかもしれないけど、演劇的でメディア的な面があるんです。

だから、その点でも非常に天才的なところがあるんだと思います。何か、そういう大衆の流れと言うかメディア的な何かひとつの力みたいなのを推測して、そして、その時代が来るんだって言ったとしたら、物凄い予言力だったなっていうように、私は個人的には思うんですね。

それから、もう一つ、今、ご議論、聞かせて戴いて、大変、傾聴に値するお話ばかりだったんですが、やはり彼の最後、腹切りとか、そういう心情的な面っていうのは、勿論、それを抜きに三島由紀夫は語れないっていうのは解りますけど、やはり、そこをあまり強調し過ぎない方がいいと、私は思うんですよ。文学にしても、もしかしたら三島由紀夫っていうのは、古典主義と浪漫主義。それを融合させるっていう相当、重要な日本文学のテーマですけど、それをやろうとした、それで成功したものもありますけど、完全にその成果というのは何処まであるかっていうのは微妙ですけど、そういう純粋な文学的な手法に関しても、何かを指し示したんじゃないかという可能性があると思うんですよ。

そこで彼の行動とか心情的な面を強調し過ぎると、やはり、その面に目が行かなくなってしまう可能性というのがあると思うんですね。それから、もう一つ、先程、冒頭で文学とか、私は文学の方なので、そっちの議論をしてもいいんですけど、リアル・ポリティックスという観点で三島に時代が追いついて来たんじゃないかっていう話をしたんですが、それは凄く簡単なことで、例えば平和主義というのが三島さんの死んだ時にあって、あの時は、要するに平和主義イコール非軍事、或いは反軍事ですよ。つまり戦争は悪だと。だから戦争を行う軍隊は、存在自体が悪。それが当時のメジャーだった訳ですけど、三島はそれを含めた戦後主張に、当時ですよ、強く反発したっていうのはその通りだと思います。ただ冷静にリアルに考えてみると、平和を守る為には抑止力が必要なので、戦争を行う軍隊は存在自体が悪と言う方が、アンチ・リアルだと思うんですよ。

ところが三島は先見的に、それはおかしいぞって言ったことが今、追いついて来ていると

思うんですよ。正に平和を守る為には抑止力が必要だっていうのは、今の現実のリアル・ポリティックスの中で、かなり広く共有されてきているんじゃないかなというように思います。

それから『文化防衛論』の中で、要するに冷厳な事実なら文化を守る為には他のあらゆるものを守ると同様に力が必要だと。この力です。力が必要だっていうのは、当時、あまり発想として無かったんですね。何か文化は、みんなで共有してどうのこうのと。しかも、守るという行為は、要するに現状維持の構えの中には存在しないと、『文化防衛論』で彼は言っているんですよ。普通は現状維持が守ることですけど、現状を変えるという思考の中に、実は守るという行為があって、これねえ、相当、未来を見据えて現代の改革派保守、改革派保守ですからね。変えて行く方に保守の思想が、しかも自民党よりも右の勢力が成立しているということは、正に守るというのは現状維持じゃないんだと。変えて行くという行動の中に、その保守っていうのはあるんだっていう、当時は多分、みんな、何を言っているんだろうと理解できなかった。

改革というのは、左翼だろうとマルクス主義だろうと。だけど、そうじゃないんだっていうことを、その時期に言って来たというのは、正に先を見る物凄い力があつたという風に思っています。だから、あまり心情、論理的なところ、彼の行動の中のそこを本当に取り払って、今みたいな先を見る政治のリアルな力とか、或いは文学に於ける非常に大きな宿題を果たすような、そういうものに挑戦しようとしていた三島の活動とか、そういった面を、もう一回、見直す時期が必要だと思う。その為にはね、あまり自死のことを前に出し過ぎると、そこに視野が入っちゃうから…」

富岡「いや、それは、だから心情と論理は別々の物じゃなくてね」

澤村「あ、勿論、それは解っています」

富岡「心情と論理。パトスとロボスっていうのが…」

澤村「三島が、それを言ったのは解るけど…」

富岡「ああ、もう繋がっていますよね」

澤村「そっちを議論にすると、知らない人は、どうしてもそっちに目が行くんでね」

富岡「うん、何となく、そう誤解されますよね。腹切り賛美みたいな（失笑）」

澤村「うん、だから、そこを一回、払って。その辺が解ってから、心情との結合性、それは絶対に出て来るんですよ。文芸手法とか技術だけじゃなくて、心情的なものっていうのは、文学の世界でも大事になって来るので、語る順番を少し替える工夫っていうのは今、必要になっていると思います」

富岡「それはそうですね。この『三島読本』は自決の一か月後に新潮が出したのですが、この中で宇野鴻一郎が書いているんですよ。宇野鴻一郎が『官能美の勝利』って書いていて、だから、そういう側面が強調されちゃうと、確かに三島さんが持っている論理や思想というものがね…」

澤村「そうそう、そう」

富岡「予言性みたいなね」

澤村「そうそう。ちょっと富岡さんに寄り添う形で、一つ付言させて貰うと『文化防衛論』の中には、こういう言い方もあって、その戦後社会に於いて共同体原理はバラバラにされてしまったと。地域社会に根差した血族、親族、共同体。家族があって、そのあと、地域社会とかね。今、家族の問題って夫婦別性とかで、実は色々割とフォーカスされていると思うんですけど、その小さな共同体が色んな段階を経て、大きな共同体、国家に結びつくんだっていう非常に重要な共同体原理の話をしているんですが、それが壊されて行ったのだと。

壊されて行ったから無くなる訳じゃなくて、壊れて、そのあと、彼はこう書いているんですよ。『一種の情動的（エモーショナルな）エネルギーとなって時に政治反応を引き起こすことになるだろう』と。だから無くならないんだというように、彼はちゃんと言っている訳ですね。これは正に今の心情っていうのは、ロジカルな政治の見方とか、そういうのは一方であるにしても、絶対に無くならないものを秘めて持っていて、何らかの形でぼおつと出て来る可能性があるんだっていうのはね、それこそ今のトランプ現象から始まって、世界の潮流と凄く近いものを感じていますね」

富岡「そう、そうですね」

澤村「ですから心情とか情動的なものっていうのは、政治においても重要だっていうことは、三島さんが言っていますし、その辺は私も賛同するところかなってところですよ」

水島「ちょっと、私はその辺ね、凄惨な腹切ったってことは凄く衝撃的な事だけれども、三島由紀夫っていうのは、さっき出た太宰もそうだし、田山花袋から始まるような私小説のね、自分の汚いこととか曝け出して、それと文学と一緒にくっつけちゃう。一番、嫌っていたじゃないですか。そんなの死んでも書きたくないっていうね。だから、そういう人間が、今言った様に政治の部分だと、しっかり分けていたっていう気がしていて、これは、私ねえ、少し皆さんと意見が違うのかも分からないけど、ちょっと聞いてみたいなあと思っていたのは、実は、これ、私が大変好きな『死者の書』っていうね」

富岡「ああ、はい」

水島「釈迦空（しゃくちょうくう）の」

富岡「はい」

水島「私は凄い小説の中で物凄く評価している本で、つまり『英霊の聲』とか、ああいうものは、実はその影響を受けているんじゃないかっていうね」

宮崎「いや、はっきり受けていますよ」

水島「ねえ」

宮崎「あのね、保田與重郎と釈迦空を、三島さんは蔵書から隠したんだよ。つまりねえ、一番、影響を受けたから知られたくないんだ」

水島「うん、いや…」

宮崎「そういうところ、ありますよ」

水島「ああ、やっぱり、そうか。そう言ってくれると、私も良かったけど、いや…」

執行「凄い影響ですよ。うん」

水島「つまりね、三島由紀夫という人物が書いた文学っていうのは、世界的なっていうか、どっちかと言うと、これを言うと誤解されると困るけど、世界の人達に解る文学。もっと言うところ、釈迦空の多分、『死者の書』というね、あれは、私がほぼ18の頃、読み始めて、何だか解んないっていうことで挫折しちゃってね、やっと、いい歳になって四十幾つぐらいかな、あれを読んで少し解ったという、これはスゲエ本だと思ったけれども、その意味で言うと、三島由紀夫の文学っていうのは世界文学的なものであって、もっと言うところ、漱石とか鴎外とか、この辺りは、やっぱり西洋文学の影響を受けて、それと格闘して、私小説じゃないものを書いているじゃないですか。

そのあと、もう田山花袋が始まって直ぐ私小説へ、みんな、行っちゃってね、もう、自分がこうだ、ああだらこうだら、僕の心はこうですよおみたいなね、そんなものばかりが増えちゃって、それを一番、嫌ったのが三島由紀夫」

執行「はい」

水島「その時ね」

富岡「釈迦空と三島さんっていうのは、非常に似ていると思います」

水島「いや、そうなんだ。だから、もしかしたら変な言い方だけど、三島由紀夫が唯一、憧れていた人じゃないかっていうね」

富岡「そうですね」

執行「でも本当に蔵書から隠しちゃっているんでね」

水島「それは凄いなあ（苦笑）」

富岡「それで恐らく執行さんが昭和41年にお会いした時に、執行さんが折口の話に強く話して…」

執行「僕も大好きだったんでね」

水島「ああああ」

富岡「実は、三島さんは、そのあと、もう一回、折口を徹底的に読み直していると」

執行「そうです。全部、読みましたから」

富岡「その前に、実は折口をモデルにした『三熊野詣』っていうね…」

執行「書いているねえ」

富岡「ちょっと中途半端でしょ、少し」

執行「はい、あれは中途半端です」

富岡「でも、実は、あれは折口の実話じゃなくて、三島さんの中にずっと眠っていた折口、恐らく、これはねえ、昭和21～2年、三島さんが22歳、23歳頃に、折口が戦後、神道の宗教観という一連のものを書いているんですよ。恐らく三島さんは、もう一回、あれを読み返して…」

執行「はい」

富岡「それで、あの最後の行為まで行くっていう」

執行「『豊饒の海』の最後に向かうところで、三島先生が読み直して、一番、研究したのは折口信夫ですよ」

富岡「そうじゃないかと思って」

執行「そう。僕がその文学論をしていて話を聞いています。ただ死んだあとね、あそこの蔵書に無いんですよ」

富岡「無いんですか」

執行「無いんですよ」

水島「凄いな」

執行「無いんです。僕も色々紹介して貰ってねえ、その時、現実の文学論で出た本とか、三島先生がポール・ヴァレリー（Paul Valéry）とかね、『豊饒の海』の題名を決めるのにヴァレリーの詩から取っているということを、僕は直に聞いたんですが、そのヴァレリーも無いですよ」

水島「ほお」

執行「ええ。だから死んだあとの蔵書を僕もみんな見てね」

水島「えっ、みんな、見て…」

執行「だから隠したと思うね」

水島「凄い…」

執行「そういうところも三島先生っていうのは、非常に公私のパフォーマンスという言葉がいいかどうか判らないけど、そういうのは考えている方。ただね、僕は今、皆さんと議論してね、やっぱり死の問題が一番、とり上げられているんですが、ただ死んだって人間は駄目で、僕は、やっぱり三島先生の持っているギリシャ的な構築性っていうのかなあ、全てを、こう、今、水島さんが言われた世界文学になれる可能性があるっていうのは構築性ですよ」

水島「うん、うん。いや、そうなんだ」

執行「あれは三島先生が持っている古代ギリシャ的な考え方ですよ。それでねえ、それによって死に向かう自分の姿全部を、あれほどパフォーマンスとして構築している方って居ない訳」

宮崎「うん」

執行「歴史上も」

宮崎「うん」

執行「だから、ただの切腹じゃないですよ。だから切腹に向かう過程が全て判っているというかな、今、こういう風に議論できるように。それで、あれを、いい悪いは別として議論できるということが、その議論、死んだことが議論の的になることが、僕は三島先生の若者に対する物凄い影響だと思うんですよ。

澤村「それね、本当に執行さんがおっしゃられたことに非常に啓発を受けたんですけど、先程、ちょっと前にあった折口信夫との関係ですけど、三島さんって凄く明晰な人ですよ。今、執行さんがおっしゃられたように…」

執行「ギリシャ的な論理ね」

澤村「死自体も公明です。彼の原稿用紙を見ると解りますよ」

執行「ああ、凄いね」

澤村「楷書で、きちんと書いていてね。私は生原稿を集めるのが趣味ですけど、ああいう原稿用紙ってねえ、大江健三郎なんて凄いですよ、原稿用紙を書き直すとか、私は、唐木順三で本を書きましたけど、唐木さんと三島さんぐらいですよ、丁寧な楷書で殆どお直しも無い」

執行「殆ど間違いが無いでしょ」

澤村「それから創作ノートを見ると、かなり構築的に書いていますよね。あれは、やっぱり彼は凄く明晰な人だったと思います。だからこそ、もしかしたら折口信夫って明晰じゃないですよ」

執行「はい」

澤村「所謂、三島さんの明晰さは無い。だけど何かがあるんですよ。それをねえ、三島さんは何か懂れているんですけど、半分は理解しながら、半分は、ちょっと、よく解らないので、隠した可能性があると思うんですよ。と言うのはねえ、私は、革命哲学としての陽明学という、最後の自決するちょっと前に『諸君』で発言したのを見てみると、結構、陽明学も物凄く勉強しているなあと思って凄い人だなと思うんですけど、要するにミスティシズム (mysticism)、神秘主義の話が出て来るんですよ。

それは大塩が、中江藤樹の何かの時にに行った時に、帰りに琵琶湖で船が風に吹かれて死にそうになった時に神秘体験をしたっていう話をしているんですよ。三島さんは多分、自分の明晰さとか何か、もう一つ足りないんだっていうのがあったかもしれない。それが神秘体験で、もしかしたら、彼は死の直前で陽明学の中で神秘体験のことを書くっていうことは、何かして、それが折口への接近とか、或いは、死に向かう論理だけじゃない何かっていうものを、三島の中で形成した可能性があるんですけど、これはよく判らないんですよ。何かそういったものがあるかどうかっていうことがね」

水島「だからね…」

富岡「違う。恐らくね、それは折口さんの持っていた、ちょっと幻を見る人って言うか、そういうところもあるけど、私は、やっぱり一神教だと思うんですよ。折口の中にあった、謂わば、神道の世界宗教観の中で、やっぱり、ある種、折口さんは一神教的なものに行くんですよ。これをねえ、やっぱり最晩年、三島は共有している。つまり、それは別に

キリスト教とかユダヤ教とかっていうことじゃなくて、これは天皇に対する見方もそうだし、それまでの三島は、やっぱり何だろうな、ちょっと、また違う古典主義と浪漫主義ですね」

澤村「そうですね。あのう…」

富岡「でも、それとは違うのが明らかに41年ぐらいから始まっていて」

澤村「うん」

富岡「一方で文学では『輪廻転生』という、つまり円環する時間ですよ。つまり多神教的って言うか、そういう円環する時間。ただ一方で自分の行動って言うか、自分の死に向うの方は、これは、やっぱり一神教的なパッション」

澤村「そう」

富岡「つまり、この二つに、片や輪廻する円環する時間。片やアルファが、始めがあって終わりがある時間、終末、エンドに向かう時間。この二つを文学と自分の人生っていうか…」

澤村「うんうん、うん」

富岡「行動と文学に、二元論でやったんじゃないかと」

澤村「それねえ、私も半分、賛成です。と言うのは革命哲学としての陽明学って、最後に陽明学にいきましたけど、陽明学っていうのは高杉晋作がキリスト教だって言っているんですよ。正に今の富岡さんの論理と凄くよく似ているんですよ。ですから筋道の有る何か西洋的な発想と、もしかしたら三島っていうのは、そういう文脈で陽明学を捉えた可能性すらもあるというように思うんですね」

富岡「うん。だから『サド侯爵夫人』なんかでマルキ・ド・サド (Marquis de Sade) ね」

澤村「うん」

富岡「つまり天国の裏階段に上がるとか、或いはジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille) ですね、そういうのを非常に深い理解とか…」

澤村「そうですねえ」

富岡「ああ、それから、これは最近、四方田犬彦さんがパゾリーニ (Pier Paolo Pasolini) の浩瀚な評伝を書いて、実はイタリアのパゾリーニと三島は非常に似ているという問題で、恐らくそれは今、イタリアで三島が見られて再発見されている理由だと思うけど、それは、やっぱり共通するものがあって…」

澤村「そうですね」

富岡「その媒介項として、私は、やっぱり折口信夫の再発見があったんじゃないかと」

澤村「うん」

執行「う～ん」

富岡「それで、その火を点けたのが執行さんだったという感じがするですよ (微笑)」

執行「いや、それは分らないですよ (笑)」

富岡「うん」

水島「いや、もう一つね、私が今、丁度、その折口を言ったのは、実は折口の民俗学とか、こっちの問題で言うと、実は三島さんに決定的に足りないものが、その部分で、三島さんっていうのは、そういう日本の伝統を引き継ぎながら逆にギリシャとか向こうのヨーロッパの特に古代ね。近代っていうものに批判は凄く持っていたけれども、古代とくっつく形になっていた。

必ずしも、私が折口を全部、読んでいる訳じゃないけども、そこそこやっているとした中で見ると、そういった日本の古代のものっていうのは勿論、色んなもので、三島さんもお書きにはなっているけれども、ただ本当の意味で言うと、世界作家っていう遺命は凄く強

いじゃないか。だから、それでこそ全共闘が最後にやった、所謂、あれは反グローバリズムですよ」

執行「うん」

水島「一応、世界革命とか何か言っているけどもね」

執行「はい、はい」

水島「もっと言えば、西部邁さん達がやっていた60年安保も、あれはナショナリズムが生んだ反米運動だし、結局、最後の、私は自分の感覚から言うと、あれは右の人も日学同とか色んな人達もやっていたけど、あの中で、やっぱり最後の反グローバリズム運動だった。三島由紀夫という人は期待した」

執行「うん」

水島「この青年達が本当に身体を張って立ち上がってくれる、立ち上がるって言うか敵ながらですけど。でも、あいつらは、やらなかった。チャンバラごっこ自己満足で終わった。この失望と言うか、じゃあ、この国の現状を変える真面目な奴は居ないじゃないかと。だから自決までね、本当に独りぼちの孤独な戦いだったんだろうっていう感じがするのと、それで、もう一つ言うと、それに、私が一番、三島由紀夫っていう人の、まあ、ある程度、ざらっとした文学は全部、読んでいるつもりだけど。やっぱり一番、感じるのは、そういった折口的な日本っていうのは意外と無い。むしろ西欧の古代とかギリシャとか、そういうところに繋がる古代人の精神って言うか」

執行「はい」

水島「だから、そういう意味では、世界作家というのはね、本当に、そういうのがあるんじゃないかと。だから余計に、日本の私小説的な文学界のね、変なの、糞みたいな状況を、たまらなくなってきたっていう感じがしているんですけどね。うん」

富岡「その反グローバリズムは正にそうで、これは、三島さんが最後に書いた『日本文学小史』という『群像』に連載したもので、実はこれは古事記から始まって最後は江戸末期まで行くはずだったんですが」

執行「ああ、そうですね」

富岡「源氏を書いたところで終わっているんですね。これは素晴らしい文学史です」

水島「ああ、ねえ」

執行「凄いよねえ」

富岡「これ、凄いんです」

執行「それは初版のやつなの」

富岡「はい、そうですね」

執行「ああ〜」

富岡「それで、これが亡くなった翌年に、こういう形で単行本になっているんですけど、この中でね、方法論のところで、やっぱり文化意思っていうことを言っているんですね。文化意思っていうのは、あのう…」

澤村「はい」

執行「文化意思」

富岡「アンチ・グローバリズムだと、はっきり言っているんですよ」

水島「そうですね」

富岡「それで、こういう風に言っているんですね。『民族の深層意識の底を訪ねて行くと、人は人類共通の暗い巨大な岩層に突き当たる。それは、謂わば、底辺の国際主義であり、比較文化人類学の流儀である。古い衆族の最も卑俗なものを極めていっても、また、逆に最も霊的なものを深めて行っても同じ岩層にぶち当たり、同じように人類共通の文化体験

以前の深みへ転落していく危険があるのだ。しかも、そこまで行けば人は全てが解った気になる』つまりねえ、これは文化人類学。それから、もう一つは、マルクスって言っているんですね」

水島「うん。う～ん…」

富岡「ですから、全て人類はこうだよと。だから『マルクスとフロイトは西洋の合理主義の二人の鬼っ子であって、一人は未来へ、一人は過去へ、呪術と悪魔祓いを教えた点で、しかも、それを世にも合理的に見える方法を教えたんだ』で『双璧を為している』、つまり何かそれぞれの文化は、それぞれあるけど、ずうっと降りて行くと人類共通のグローバルな何かがあって、それを20世紀の構造主義にしてもマルクス主義にしても、文化人類学にしてもフロイト、フロイトは人間の心の底へ行くと、みんな、共通の何かがあると。リビドー（libido）っていうのがあると。これは文化じゃないんだと。つまりグローバリズムは文化じゃないっていうことをね」

水島「文化じゃないですね」

富岡「実は一貫して、三島は言っていて…」

水島「いや、それだけの視野がね…」

富岡「そうなんです」

水島「あったっていうのと、やっぱり三島さんが、よく言っているドストエフスキーとかムイシュキン（公爵）、あの『白痴』とか、ああいうことも含めて、やっぱり、私が凄く、ロシアに今、関心を持っているのは、近代がないんですね。つまり中世からそのまま10月革命へ行っちゃう」

執行「はい、そうですね」

水島「近代ヨーロッパが無い、それを担ったのが文学者でアレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン（Aleksandr Sergeyevich Pushkin）とかフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（Fyodor Mikhailovich Dostoevsky）。特にドストエフスキーは、そういうものは、あとレフ・ニコラエヴィチ・トルストイ（Lev Nikolayevich Tolstoy）。それで何処かで書いていたと思うけども、トルストイが家を出るじゃないですか、女房が嫌だと言って、それを女房が酷い奴でヒステリーだから出たと言って、それでトルストイを解釈するけど、あれは小林秀雄でしたか、ちょっと…」

富岡「まあ、それは恐らくね、ちょっと」

水島「いや、それは、とんでもないと。そんなの全然、解っていない奴が言っているんだと。何か、さも解ったようなふりをしてね。だから、そのことですよ。今言ったように三島由紀夫っていうのは、そういうのを一番、嫌った人、作家で、この部分が、もし、今、若い人にウケているところがあるとしたら、そういったものを突き抜けた、今迄、ベタベタ、ベタベタやっていた奴、戦後の保守や左翼がやって来たことを三島由紀夫だけは突き抜けているっていうね、ああ、こういうオジサンが居たっていう、それで格好いいじゃん、腹、切っちゃってと言ってね。こういう言い方は良くないし、失礼だけど（失笑）、ただ、そういう感覚の受け取り方が騒ぎ始めているのかも分かんない。それから、もしかしたらイタリアとか他の所でも、そういうのがあるのかなあというね」

執行「だから本当に『言行一致』ですよ」

水島「うん」

執行「これ、大塩平八郎じゃない、さっきの陽明学じゃないけれども、まあ、どうでしょうか、日本だと戦後、あとヨーロッパ、欧米でも第二次世界大戦のあとで『言行一致』の本当に凄い人って居ませんよ。やっぱり運動家は、もう運動だけでねえ、行動だけ、あと知性の人、もう知性だけですよね。

やっぱり、そういうところで『言行一致』というのを本当に見せてくれたと言うか、だから三島由紀夫っていうのは文学者として勿論、優れていて、僕は文学者として好きですが、だから先程、三浦さんが言われたように、本当に僕もねえ、80、90の三島由紀夫の作品っていうのを読めたらね、もう、これ以上の幸福は無いと思っていますが、でも、やっぱり、あそこで、ああいう凄い計画の下に死んだという、それも切腹でね。

あれをしたことによって、何か本当に人類的、または、もう人類を救う様な。こう、一つの神話ね。日本を中心に世界に、これを発信したのではないかと思っている訳ですよ」

水島「うん」

執行「日本人の生き方の一番底辺を示す、昔は欧米人から気持ちが悪いと言われていた、あの武士道的な切腹とかね、日本人の持っている武士道的な感性をヨーロッパ、欧米の人はみんな、日本っていうのは気味が悪いって言っていましたよ。あれが三島由紀夫の事件から吹っ飛びましたよね」

水島「うん」

執行「暫くは気持ち悪いって言っていましたが、今はもう、すっかり欧米の人が三島由紀夫を格好いいと言っていますから、これは、やっぱりね、三島由紀夫が死んだだけじゃなくて、その自分の全作品をひっくるめて自分の最終文学の為に計画をして、死に向かって、3年、4年かけて、どんどん突進できた。だから、要するに死ぬことを論理化したということですね。本当の結果じゃないかと思っているんですね。だから日本が世界のそういう思想をリードしていく、やっぱり三島思想というのは、日本人の宝物というか、今、日本人が持つ一番、重要なものじゃないかなと」

水島「うん」

執行「うん、そう思うと、死んだことは勿論、残念ですが、そう思うことによって諦めもつくっていうかな、う〜ん」

水島「だから、さっき澤村さんが、それをあまり大袈裟にしない方がっていうようにおっしゃったけど、今、執行さんがおっしゃったことでね、私は昔、記録を読んだんですけど、三島由紀夫は相当、物凄いことを計画的にやっていますよ」

執行「そうですよ」

水島「何分に何をやって、この総監を、こうやって縛ってと、ちゃんとね」

執行「縛り方までやっていますから。それも全部」

水島「そうそう、それで、まあ、これは間違いだけど、あの自衛隊の総監がね、縄目を受けて辱めを受けたということで、腹を切るんじゃないかって心配までしていた。そんな玉じゃないんだけど、向こうはね。ただ、そういうところまでやって、それから腹の斬り方も、専門家の書いたのを何処かで読んだんですけどね、やはり、しっかりと、もう深くまで切って…」

執行「あれは腸まで届いていますよね」

水島「内臓まで出ちゃっているというね」

執行「腸は全部、出ましたね。うん」

水島「だから、三島は介錯を受ける切腹じゃなくて、自分で死ぬやり方」

執行「うん、そうですよ。あれは介錯が無くても死ぬやり方です」

水島「そうみたいです。それと、森田さんはきっちりね、薄くスツと切って…」

執行「表面を切った」

水島「後ろで介錯がやり易いようにという」

執行「あれが普通の切腹ですよ」

水島「ねえ。何かそういうことを考えていると、感情で、激情で何だかとかね、そういう

ようなことでやったんじゃないっていうね」

執行「だって、あの切腹の仕方って皆さんもご存じだと思うけど、あの『憂国』っていう作品の映画化もあったじゃないですか。あの映画を観ましたけど、映画と全く同じですよ」

水島「同じやり方みたいですね」

執行「ということは、もう…」

澤村「あれは腸が出て」

執行「ねえ。もう映画の中で全部やっていて、だから結局、本当に衝動でもない、勿論、別に嫌がらせでもない。全部、論理ですよ。三島由紀夫という人の中にあった論理」

水島「だからねえ…」

執行「僕は、その論理が、今の若者にアピールしたんだと思うんですよ」

水島「あれですよねえ」

執行「はい」

水島「肉体を使った文学作品みたいなものでね。さっき冒頭におっしゃったけど、本当に最後の文学作品っていうかね、遺作というね」

執行「はい」

水島「自分の身体を使った表現としてやるから、何処かで響いて来るっていうかねえ」

執行「うん」

水島「どんな世代の人達にもねえ、っていう感じがするんですけど」

執行「だから、僕は、あれが最後の文学、最終文学、最後の文学作品だって、あの義挙のことを、政治的な人は、みんな、義挙としてしか捉えないですけど、僕は文学が好きなので、あの最後の文学作品、だから行間を読むっていう考え方から言うと、その最後の死のところに向って、本当に死んだあとの総監の心配までして全部、文章に書かれていると思えば、僕は最終文学作品だと思っているんです。あれが最終文学だということによって、何か『豊饒の海』から、僕自身も全部が読解できるようになったのでね、うん」

水島「おっしゃるように、あの映像を観るとね、我々は生じゃなくて映像しか見られないけど、でも、やっぱり、あのバルコニーに立って演説して、自衛隊員の反応も全部、予想していたし、全部、解った上で、きっちり決めていたっていうねえ」

執行「そうですね」

水島「だから本当に、それだけ何か、まあ、これはちょっと感傷的な言い方だけど、それだけ三島先生っていうのは、あの時、孤独って言うか日本の中で孤立した感じで、ああいう風にやらざるを得ない自分というのを意識していたんだなあっていう気がするんですけどね」

執行「うん」

水島「三浦さんは今、あまり発言が無いので、ちょっと聞きたいんですけど」

三浦「はい。すみません。いやいや（苦笑）」

執行「いや、三浦さんの残念がる気持ちは、よく解りますね」

三浦「また、何か話を落としてしまって申し訳ないですが、先程、澤村先生がポリティカルな面の話もされたんですけど、澤村先生のおっしゃることの意味というのは、現実政治としては、その通りだと思うんですけどね。その現実政治という点で言うと、私が三島由紀夫さんのことを、映画化の監督を為さって亡くなられた若松孝二さんでしたっけ、映画にされたんですよ。ちょっと申し訳ないですけど、僕、あれは正直、言うていないです。

ただ、あの時にある方が僕に若松監督を紹介してくれまして、監督も忙しいでしょうし、

ちょっと失礼な言い方をしたら、あまり文学とかには興味がない方だと、事件としてしか考えていない方だったっていう感じがしたので、それはいいですよ、それはいいですよ、そんなのそれぞれでね、まあ、読まなくてもいいから、これだけは最低限、聞いておいた方がいいんじゃないですかと言って、三島さんのいくつかの公開されている資料をお渡ししたので、若松さんが何故か私の名前をクレジットに入れてくれたんですよ。

まあ、それは大変、有難かったんですが、あのあと僕が一杯、奢ったからかなあ、まあ、それはいいんですけど、そのあと直ぐ若松さんが亡くなられて、ちょっとショックでしたが、何が言いたいかって言いますと、その映画をある中国人の人が観て、日本に居る方ですよ。私の所に電話が来て、自分は三島さんを物凄く尊敬していて、その人の映画に三浦さんが協力していたっていうのが凄く嬉しかったと言ったんで、ああ、そうか、三島さんのどういう作品が好きなのって聞いたら、作品も勿論、好きだけど、そんなに全部が中国語に訳されている訳じゃなくて、自分は正直言って、そんなに深い理解は無い。ただ、三島さんに対して、一番、自分が尊敬して有難いと思ったのは、文化大革命の最中に文学者の政治声明を出してくれたことです」

執行「ああ。はあ～」

三浦「文化大革命、それは宮崎先生の方がよくご存じでしょうが」

執行「はいはい、はいはい」

三浦「文化大革命に抗議する声明文を、石川淳さん、安倍公房さん、川端康成さん、三島由紀夫さん、この4人が当時の日本の文学者で文化大革命に於ける芸術家の迫害にきちんと抗議してくれたのは、三島先生と他の3人の方だったと」

執行「はい」

三浦「恐らくあれの中心になったのは、三島先生と安倍先生だろうと。この二人は本当に中国人として感謝していると。だから、実は、これ、恥ずかしいことに僕は忘れていたんですよ。だから、その声明文とか、そのあとのインタビューとかを読みますとね、やっぱり、それこそ今、当時の文化大革命に対する色んな報道とかを考えると、やっぱり、あの時点での政治的な先駆性というのは凄いと思いますよ」

執行「そうですね」

三浦「僕は、逆に安倍公房さん達が、それにサインしているのも大したもんだと」

一同「そうだね」

三浦「うん」

澤村「あの時代にねえ」

三浦「あの時代に」

執行「ジャーナリズムは、みんな、もう左傾でしたからね」

三浦「あの時、特に三島さんが言っている言葉で、非常に、僕は、ああ、なるほどと思ったのが、自分の知り合いの中国文学者。今、弾圧されている中国文学者とその人が色々交流して、その人に色々助けて貰ったりもしていたんだと。資料を貰うとか、それは文学者とか研究者同士はそうですね。その人が、相手がこういう目に遭っている時に、中国政府に遠慮して何も言わないと。これは、あまりじゃないかっていうね」

執行「特にジャーナリズムね。ああ、文学者もそう」

三浦「うん。だから、それは、やっぱり中々迫るものがありましたね」

執行「やっぱり言行一致ですよ」

三浦「うん。まあ、それを言ってくれたと、まあ、もう…」

富岡「まあ、朝日新聞始め、文革万歳でしたからねえ」

執行「もう素晴らしい、ワイワイですよ」

富岡「ワイワイでしたからねえ」

執行「特に朝日新聞はそうだね」

三浦「まあ、ここで名前を出しちゃってもいいから出しますけど、中国人の人は、劉燕子さんっていう人です。それは翻訳者であって…」

執行「ああ、そうですか」

三浦「今、日本に住んでチベットのあの方の本とか、ああいうのを訳すことをする劉燕子さんという方で。それは、やっぱり凄く印象的なことの一つですね。それと、もう一つは、さっき折口信夫さんのことが出ましたが、私は、三島さんという方は、恐らく折口さんの的なものとか、或いは柳田國男さんの的なものに対して半端でなく理解していて、逆にそれに対して反発もあったんだと思うんですね」

執行「うん」

三浦「さっき富岡先生がグローバリズムという言葉を使いましたが、実は、グローバリズムというのは、単にお金が動くとか、金融、資本主義の支配っていうんじゃないくて、世の中というのは結局、全てを辿って行けば同じ文化古層に行くというのは、実は、僕は正しいと思っているんですよ」

執行「はい」

三浦「これは正しいと思っているけど、だけど人間っていうのは文化古層から上がって行くことによって、人間になっていく訳なので…」

執行「はい。それで民族が出来て来るので」

三浦「それで、あのう…」

執行「はい」

三浦「だから三島さんの考えの中で、あれは、やっぱり文化以前のもの、それを文学者が、今、こうやって日本文化の中で生きて、日本語を使って、三島さんが今、一番、日本語が完成されたのは古今和歌集だという言い方したと、確か思ったんですけど、やっぱり、そういう文化体系の中で自分が生きているのに、その古層に戻って行けば、何か凄く普遍的なものが見つかるとか何か凄く新しいものが生まれるみたいなのは、実は凄く退嬰的な考えなんだという、そういう信念があったんだろうと思いますね。

折口さんという人は、そんな単純な人じゃないですけど、僕は折口さんのは殆ど読んでいないですけど、僕は、折口さんの本を読んで思ったのは、全然、勘違いかもしれないですけど、この人は下手したら古代日本人の言葉を喋れるんじゃないかっていう位に…」

執行「ええ、そうですよ」

澤村「そうそう、そうですよ」

水島「実際、そうですよ」

執行「自分は、いっていますよね、古代にね」

三浦「うん。逆に言うと、多分、あの人は19世紀のニーチェみたいな感覚を持っている人だなと」

執行「ええ、ええ」

三浦「三島さんは尊敬しつつ、やっぱり反発もあったんじゃないかな」

執行「うん」

三浦「ちょっと複雑な気がしますね。最後に一言、これで終わりにしますが『豊饒の海』に関しても、また次元の低い事を言いますが、これを若い人が喜ぶ、面白く読んでいるとしたら、あれは、やっぱり転生ものだからですよ」

執行「何を？」

三浦「輪廻転生やっているから」

執行「ああ、転生もののね、はい、はい」

三浦「今、ライトノベルって言いますか、ああいう若い方が、所謂、大衆小説という言葉がいいのかどうか判りませんが、最も面白がられるパターンというのが、ある種の転生ものですよ」

浅野「生まれ変わりますか」

三浦「生まれ変わりますね」

執行「そう、輪廻転生ね、うーん」

三浦「あれは、確かに私は、あまり、それを評価するかしないかは別として、僕は評価していませんが、でも、みんなに凄く受けたのが特攻隊の映画で一番、ウケたのが、現代の女子高生が、あの時代に戻るってあったでしょ」

執行「はいはい」

三浦「うん。僕は、ああいうのは個人的には嫌いで、そんな、結果を知っている人間が向こうに行くというのは一番、卑怯だろうと思うんだけど、まあ、それは置いておいて、転生性ものっていうのは、今、若い人にとって物凄く、やっぱり三島さんが死ぬ1週間前のインタビューで言っているんですけど、何故、ああいうことを考えたかって言うと、お爺さんはこういう生涯を送りました。お父さんはこういう人でした。それを引き継いで、私は、これをやっています。もう19世紀に全部、書かれちゃった小説で、もう、それは使い古されている」

執行「うん」

三浦「この転生というパターンをとると、一気に時代を超えて行くことが出来て、そこに統一性を齎せるんだと。それは勿論、これを今、比べてしまうのはもしかしたら三島さんに凄く無礼なことかもしれませんが、やっぱり今のそういう19世紀的な小説の在り方っていうのが、あまりウケなくなっている中で、恐らく三島さんの『豊饒の海』というのが意外と、そこにある難しい思想とかを超えて、若い人の中には意外と新鮮なものだとか、或いは自分達も、ああ、こういうのを書いてみたいなっていう、そういうものとして受け取られているんじゃないかなっていう気がしますね。

最後に、これは僕個人の考えですけど、戦後文学というのは勿論、僕は結構、好きな文学がありますから、全否定する気は全く無いんですけど、僕の言うことは、あと100年したら外れるのかもしれませんが、僕は少なくとも昭和の区切りで言ったら、戦後文学で後世に確実に残るものっていうのは、戦後にスタートした人が前提で、僕は三島由紀夫と中上健次しか多分、残らないだろうなあと思うんですよね。それぐらいのものだと思います。

中上健次という人は今、あまり読まれていないでしょうけど、あれは多分、いつか復活すると思いますね」

澤村「岩波文庫に入っていますから」

三浦「うん。ああ、そうですか」

執行「岩波文庫に入っているの、ふう〜ん」

澤村「入っていたと思いますね。ええって思いましたけどね」

三浦「勿論、大江健三郎だって、僕は決して嫌いな作家じゃないけど、僕の好き嫌いを超えて言うと、何かさっきのグローバリズムということに関して言うと、ヨーロッパで今、読まれているとか、或いは日本で読まれていることのひとつの理由は、やっぱりグローバリズムというのは何も今、生まれたものじゃなくて、僕は、もう19世紀に生まれたものだと思っていて、近代が生み出したものですよ。

近代というのは簡単に言ってしまうと資本主義ですから、それだけじゃないけど、一応、

資本主義と個人主義ですから、それって結局、世界というものを、お金の論理と、あとは全ての人間は基本的に平等だし、文化とか伝統とかいうものから解き放たれて行くことがいいんだっていう、そういう、まあ、もっと言ってしまえば、18世紀からの、そういうフリーシンカーというか啓蒙思想から、ずうっと始まっているものですよ。

これっていうのは、やっぱり結局は世界を均質化しちゃうんですよ。これは三島自身も言っていて、それこそ安倍公房の小説とかを例にとっていて、今だったら多分、三島さんが長生きしたら村上春樹って言ったんでしょうけど、もう、これから世界の文学っていうのは東京に居ようがニューヨークに居ようが、パリに居ようが、もしかしたら北京に居ようが、みんな、同じような事を考えて同じようなことを書いていく小説になるんじゃないかと。

でも僕は絶対にそっちの方に行けないからって。日本の古典が自分の中に入っている文学者っていうのは多分、僕のジェネレーションで終わっちゃうけど、やはり自分は、そこに生きて行くしかないからっていう言い方をしているんですよ。今の僕の中にも、日本の古典なんて入っていませんし、今の若い人の中にも一部の本当に優れた人しか多分、入っていないでしょうが、やっぱり、そういう世界に戻らなくちゃいけないっていう感覚が生まれた時に、やはり三島さんの文学っていうのが迫って来るんじゃないですかね」

執行「う〜ん…」

三浦「僕はそれを思います。戦後の多くの文学というのは、優れたものがいっぱいありますけど、多分、ヨーロッパの人が読んだら、ああ、これは真似しているなと思うと思うんですよ」

澤村「三浦さん、それねえ、最近の日本の近代文学の研究の中で、こういう象徴的な言い方があるんですよ。要するに漱石、鴎外は、その内、読まれなくなるだろうと。残って行くのは鏡花と露伴だっていうのと、よく似ているんですよ」

三浦「ああ」

澤村「漱石、鴎外は今の文脈で言うと村上春樹みたいなもんですよ。世界文学に通じますし、だから、よく読まれるし、世界にも翻訳されていきますけど、例えば折口信夫のものは絶対に翻訳が出来ないですよ。保田與重郎も多分、翻訳しても解らないと思うんですよ。むしろ、そちらの方が日本語の作品として残っていくんだっていう、見方が為されているんですよ。

だから、もしかしたら、その辺、三島さんはよく解っていて、その日本的な色んな文学者の取り組みというのは、とにかく自分の中に入れて、それを咀嚼しようっていう風に努力したかもしれないなあっていうのは思ったりするんですね」

執行「ああ…」

富岡「『死者の書』は、英訳されて高い評価を受けていますね」

澤村「うん」

三浦「僕は『死者の書』とか、まあ、最後に本当にふざけたことを言いますが『死者の書』とかは絶対にアニメになると思うんですよ」

執行「うん」

三浦「あれはアニメにしたら絶対に面白いと思うんです。三島由紀夫さんの小説とかも、泉鏡花とかもそうかもしれませんが、意外と映像化できるようなものがいっぱいあるような気がしているので、その辺も意外と現代的なのかなとか、嵌るのかなっていう感じがしますね。うん」

澤村「『死者の書』は、そうかもしれないですね」

三浦「ただ三島さんの映画化って、あまり上手くいっていないですね」

水島「作品としては、悪いけど『死者の書』もね、アニメにしたら全く違う作品になってしまいますよ。まだまだ映画化できるかとか、そういう問題じゃないですよ。あの内容の問題が大事でね、大体、私は今、それを聞いていて、ちょっと具体的に聞きたかったんだけど、中上健次は私の大好きな作家だけど、それと三島由紀夫という作品と、何処に共通性があるんですか」

三浦「いや、共通性は、むしろ全く真逆な人だと思うんですよ」

水島「おお。じゃあ、三島さんが残る理由は、どういうところがいいんですか」

三浦「ああ、三島が残る理由ですか」

水島「うん」

三浦「いや、それは、もう、はっきり言ってしまうと、三島文学というのは、やっぱり、戦後に生まれたものですけど、敢えて言うと、それこそ本当に日本の古事記以来の伝統というものの、ずうっと流れにあるものなので、これは必ず将来的に残るものですよ。戦後の文学の多くというのは、やっぱり、僕は戦後にしか生まれ得なかったものなので、戦後という時代が終われば、やっぱり、それと共に消えて行くような気がするんですよ。それで中上健次という人は、僕は思いますけど、あれっていうのも、本当に日本の古層に三島さんとは違う形で届いている文学だと思うので、それは彼の出身ということもあるんでしょけど、僕は、やっぱり中上健次の文学というのも、三島さんとは違う形で、それこそ僕は、古事記とか今昔物語とかああいうものから、ずう～っと続いて来ているものだと思うんですよ。

だから、この二つの文学というのは、やっぱり日本の文学の伝統の中で、本当にその中から生まれて、その中で当時の時代で育って来たもので、僕はこの二人はねえ、恐らく今後も読み続けられるだろうと思います。三島さん程、中上さんのは読み易いものではないかもしれないから、読者は限られるかもしれませんが、中上健次さんが三島由紀夫に対して、あまり、沢山、喋っていないんですけど、ある対談で、三島由紀夫程、差別っていうものをよく解っていた人は居ないっていう言い方をされていて、あと、もう一人は谷崎潤一郎だって言っているんですけど、それこそ三島由紀夫の小説の中に出て来る非常に遅しくて、あと、おあいを担いでいるような男性に対する、所謂、文学青年的な人の憧れみたいなもの、まあ、あの構図ってというのは本当に日本の文化の中に物凄く根付いているもので、差別反対とか言っている、どんな文学者よりも三島とか谷崎というのは日本の文化の古層みたいなものが、よく解っていたっていう言い方を三島健次がしています。

僕は、やっぱり中上健次の作品を好きか嫌いかって言ったら苦手な方かもしれませんが、これは日本でしか生まれなかったものだと思うんですよ。だから、そういう点では、やっぱり凄い作家だと思っています」

宮崎「和歌山県の新宮市がね、中上の産地だけど、あそこに熊野大学というのをやっているんですよ。中上ファンが集まるの。今年、何をやったかって『三島生誕百年シンポジウム』をやったんだ。だからね、やっぱり共通性は底辺であるね」

富岡「中上さんの最高傑作である『千年の愉楽』の中に、全く同じタイトルのこれが入っているんですよ（笑）。そういうのもあるから、中上が三島由紀夫を相当、意識していたと思うんだけど、やっぱり三島さんとスケールは、ちょっと違うという感じはしますね。というのは、やはり中上は被差別部落、まあ、彼は『路地』と言う。路地が消滅しますから『地の果て 至上の時』、それ以降、中上は放浪しますね。文学自体が彷徨ってしまったという気がしますね」

澤村「私もまぼろしの担当だったですけどね、担当を命じられて、そのうち死んじゃったんですけど、やっぱりファークナーの影響とかが強いと思うんですよ。だから日本的な

面もありますけど、アメリカの土俗的な文学のスタイルというのも…」

執行「『八月の光』か」

澤村「そうです、あれはフォークナーの影響が結構しているんじゃないかと個人的には思ったりはしますね」

執行「ただ部落問題とか、ああいうのは無くなっちゃうと、中上健次の作品って何か解らないですね」

富岡「う～ん、ただ、まあ、言葉のエネルギーが才から出ていますから、日本語としては、やっぱり残るんですよ」

執行「日本語として」

富岡「日本語。『千年の愉楽』も、やっぱり語りの日本語は残ると思いますね。それは三島さんの日本語が残る。ただ中上の場合は非常に狭い範囲、狭い日本語なので、非常に限定された力」

執行「ああ。社会問題として狭いってということじゃなくて」

富岡「うん。なくて」

執行「部落問題とか」

富岡「日本語。日本語そのものが狭いですね」

水島「特に民族を書くみたいなね。やはり土着の凄じじゃないですか。あれは和歌山のね、あのう…」

執行「いや、あの辺の…」

水島「紀の国のね」

執行「う～ん。古いのがね」

富岡「だから、もうひとつ、三浦さんの発言に付け加えさせて戴ければ、やっぱり中上も天皇っていう存在に突き当たるんですよ。最初のルポルタージュ『紀州 木の国 根の国物語』で天皇っていう存在ですよ」

執行「はいはい」

富岡「ですから天皇の棺を担ぐという人々と天皇という存在があるから、木の国ですから、やはり、そこは三島さんとは方向が違うけれども、この国の天皇とは何かという問題に…、でも中上さんは46歳で亡くなっちゃうから」

執行「40代でねえ、早死にしたんだ。でも一番、面白いのも、あれが残ると、今ねえ、三浦さんもおっしゃられる、この双壁ですよ。これがねえ、僕なんかの見方だと、三島さんは物凄いジェントルマンでしたよ。教養人の代表で、ジェントルマン。これ程、本当に礼儀が凄い人って居るんだっていうのでビックリしたのは、僕、多いんだけど、中上健次は逆で、何か酒乱って言うか何て言うんですかねえ、メチャクチャですよ」

水島「うん」

執行「でも、この破壊された人間と、ジェントルマンで家柄もいいですよ。そういう方が残るって何か底辺に共通項を感じますよね。人間の一番深い、人間が生まれて来る一番、深いものを共通して持っているようなね」

水島「そうですね」

澤村「中上健次は確かに天皇の事を言っていて、瀬戸内寂聴は、中上さんが最近、天皇、天皇って言うので私は怖いって言ったんですけど。ただ彼の言う天皇というのが、どれだけ深みがあるかっていうのは、やっぱり多少補充しなきゃいけない。三島さんとは、ちよっと違う…」

富岡「ただ昭和天皇の崩御直前、実は崩御の日に文学界が、つまり折口の弟子の岡野弘彦さんが中上と対談していて、これが名対談ですよ。中心になっているのは折口の話ですよ

ね。片や柄谷行人と京都の浅田章が対談しているんですよ（笑）。この二つの対談が、同じ文学界に載っていて面白いです」

水島「なるほどね」

三浦「中上健次は柄谷さんと付き合ったのが間違いだったですね」

澤村「私もそう思います」

三浦「あれは本当に、人生を間違っただと思うけど、人間はそういうことがあるからしょうがないですね」

一同「（苦笑）」

水島「付き合いというやつはね、確かに。そういう意味で、三島由紀夫という死が自決であったと同時に、やっぱり現実には何が終わったんだろう。社会的な問題と文学的に言う、と、さっき言った私小説的なものとか自分を曝け出して、まあ、太宰や色々居るじゃないですか、ごろごろと葛西善蔵とか色々自分の生活や苦しみ売り出していくっていうね。こういう傾向の中で、今、文学が本当に、冒頭に宮崎さんにおっしゃって戴いたように全然、元気が無くなっているというのは、もう自分の脳を曝け出してやっても面白くもなんともないんでね」

富岡「いや、だから私小説にも、いいのがあるんですけどね（苦笑）、僕は川崎長太郎とか大好きだけどね（笑）」

水島「いやいやいや、それはね、こじんまりとやっているのは、みんな、いいのもありますよ」

富岡「あります、あります」

執行「こじんまりはね」

水島「それは、こじんまりとして纏まっている…」

富岡「ただ、今、時代がやっぱり、そういうのを許さなくなっちゃいましたからね。そういう私の…」

水島「うん。だから文学の好事家は、そういうのを喜ぶけどね、今言った様に大きな意味での政治と文学とか、政治と芸術というものの、ずっと戦後に論争があったけれども、今や、それさえも無くなっちゃった。つまり、それが終わったのは三島由紀夫というのが腹を切ったからですよ。ということじゃないかと。あれで、もう、それ以上の事が言えなくなっちゃっているっていうね」

富岡「それ、その通りだったと」

執行「とにかく物質文明っていうのはね、もう今、世界中で凄惨なところに来ていますよ。物質」

水島「うん」

執行「19世紀からの。やっぱりねえ、今、中上健次、それから三島由紀夫って出ましたが、特に三島由紀夫。やっぱりねえ、世界中の人が求めている、特に若者はね。これから求めて来るのは、やっぱり言い古されたことかもしれないけど、人間にとって魂とは何だったのかということだよ。魂とは何かですよ。あまりにも物質とか、あと人間論だと肉体である人間に世界中は固執していますよね」

水島「うん」

執行「でも、やっぱり三島由紀夫は、もう、それを投げ捨てた訳で、その投げ捨て方が劇的じゃないですか。だから、そこに、やっぱり感動する人も多いみたいです」

富岡「確かに」

執行「うん」

富岡「ただ毎日、日本の男子達と女子達という若者と接しているからねえ」

執行「女子は居ないの（笑）」

富岡「いや、女子も居ますよ」

執行「ああ、そう（笑）」

富岡「いや、こいつらは、どうなんだろうという思いは結構、ありますよ」

執行「あるね」

水島「うん、いや…」

富岡「うん」

執行「感動はするけど弱いでしょ」

富岡「うん、だから確かに三島は格好いいっていう思いは、根源的な意味では解るけどね」

執行「これはあるんだね、うん」

富岡「こいつら、大丈夫かな、まあ、これ、いつも同じ（笑）」

水島「結構、賛成だね」

富岡「え？」

水島「あのう、つまり…」

執行「でも、格好いいと思うのって結構、重要よ」

富岡「いいですよ」

水島「重要だけど、それは出発点でね」

富岡「そう」

水島「今言った様に今迄、ずう～っと戦後の80年は結局、評論する奴はいくらでも居る訳だよな。ああだこうだと言うのは居るけども、結局、じゃあ、お前はどうするんだって言われた時、何もしないっていうね。これは、やっぱり三島由紀夫が求めた、或いは、全共闘に求めたのは、何処かで三島さんが書いていますよね。そういう結果とか、そういうものを求めているんじゃないと。どうするんだっていうね」

執行「そうだね」

水島「やるのか、やらないのかっていうね、こういうことが求められている。実際にやっちゃったというようなことなんだね」

執行「はい」

水島「その政治や芸術や文学っていうもののの中で、これは後半になるので、少し戻したいけど」

執行「はい」

水島「私は、三島由紀夫さんが亡くなられて、ある程度、時間が経った時に思ったのは、よくトーマス・マンのことを言っているじゃないですか。その時、三島…」

執行「トーマス・マン、大好きだった」

水島「もう大好きだったんですよ」

執行「うん」

水島「その中で、私が、あんまり言われていないので『ベニスに死す』のね」

執行「はいはい」

水島「ギリシャの美少年を追いかけてコレラにかかって死んじゃう。つまり、これねえ、三島さんは凄く意識していたと思う」

執行「うん、あれは凄い…うん、三島美学の極致だね」

水島「つまり文学の大家、芸術の大家が、芸術の最たるものである美少年を見つけて、ギリシャの美を見つけて惚れちゃって追いかけて回して、そうしたら、どんどん自分も髪は染めるわ、化粧はするわ。派手な服を着るわ。もう非常にみつともない姿になっていく」

執行「はい」

水島「でも、それでも追いかけて回して、最後はコレラにかかって苺を食って、だらけ放題ですよ」

執行「はい」

水島「店に売っていた苺を食べちゃうんだから。その品格とヨーロッパの芸術家の最たる立派な男が、そういう風に段々墮落していく姿ね、これを見た時、やっぱり三島由紀夫っていう人は、そういう芸術とか、そういうものをやっているのが、いつの間にか、こういう周りのそのコレラの社会。まあ、日本社会ですよ」

執行「はい」

水島「こういう中に居たら、どんどん駄目になって行くというね、その時に終止符を打ったって言うか、私は、そのギリシャの美少年というのが、面白いのは歯の中を見ると萎黄病なんですね。つまり本当の美少年じゃない。インチキ・ギリシャ美。だからルネッサンスを、私はそうだって、ヨーロッパの近代はそれだって指摘したんですけど」

執行「それ、『魔の山』の題材もそうですからねえ」

水島「そうです。そうそう」

執行「『魔の山』も、僕ね、結構、三島先生と文学論したの。三島先生は『魔の山』が好きでね」

水島「相当ねえ」

執行「ええええ」

水島「だから三島由紀夫っていうか、あの文学はね、あっちのトーマス・マンとか、ああいうもので…」

執行「影響が凄いですよ」

水島「パクっている訳じゃなくて影響をね」

執行「いや、影響を受けていますから」

水島「影響を受けて、そういうものを創っている。つまり文化と芸術って言うか、美とそういうものの自体が、それからデカダンスに陥っていくね」

執行「そうですね」

水島「こういう姿っていうのをねえ、やっぱり、そのところに一番気が付いていた作家じゃないかなあと」

執行「それで戦後の結構、三島論を見ると、トーマス・マンとの関連っていうのに気づいている方は少ないですよ」

水島「ただ、所謂、影響を受けた人は凄く多いですよ」

執行「はい。いやいや三島由紀夫が影響を受けているということに気づいている人が少ないように思う」

澤村「確かにそうですね。あの『魔の山』との関連性は深いと思うんですけど…」

執行「あと、『ベニスに死す』ですね」

澤村「そうですねえ」

執行「うん」

澤村「正面切った論考っていうのは確かに無いですねえ」

執行「いや、無いですねえ。僕はあまり見たことが無いです」

浅野「少なくとも今、若い人はトーマス・マンを全く読んでいないですよ（苦笑）」

執行「読んでいないですね（失笑）」

浅野「そう」

水島「ほお」

執行「僕のファンの方は、みんな読んでいますから（笑）」

一同「（笑）」

執行「僕が勧めているので」

水島「まあ、読んで貰いたいですけどね。ただ、そういう意味で言うと芸術家のね、だから、本当にやらざるを得なかったし、私は、もっと簡単に言うと、特攻隊だったと。遅れた特攻隊で行って来ますと。そうしたら隊長、僕も行かせて下さいって森田必勝君ね」

執行「そうですね」

水島「そういう者を一緒に連れて逝ったんじゃないかという感じがしていて、ある意味で言うとな、物凄い葛藤があって、どうしよう、どうしようなんて思っているんじゃないかと、もう逝く時は行こうと」

執行「はい」

水島「三島という人は決めていたんじゃないかっていう気がするんですけど、宮崎さん、宮崎さん自身は『文化防衛論』とかね」

宮崎「はい」

水島「こういう問題について、あれが出た時、私は『非政治的人間の考察』というトーマス・マンの影響、あの『文化は連続する』とか色々な言葉があったので、凄い影響を受けたなあと思っているんですけど、宮崎さんは『文化防衛論』をご覧になれていますか」

宮崎「いや『文化防衛論』はねえ、要するに消化不良を起こすような箇所が何か所もあって、よく解らないところがありますよ」

水島「ああ」

宮崎「それでねえ、それよりも、やっぱり『日本文学小史』ね」

執行「はい」

宮崎「そこに、もっと解り易い、これ、実は文化防衛論ですよ」

執行「ええ」

富岡「そうですね」

宮崎「それでねえ、そうそう、今、丁度、ここだ」

水島「はい」

宮崎「『古事記』。三島由紀夫の『古事記』はね、『私は古事記を晴朗な無邪気な神話として読むことはできない。何か暗いものと悲痛なもの、極度に猥褻なものと神聖なものとの、恐ろしい混淆を予期せずに再読することができない』こう言っているんですね。だから『儒教道德の偽書とか、かびくささにうんざりすればするほど私は日本人の真のフモールと、また真の悲劇感情と、この二つの相反するものの源泉が古事記にこそあるという確信を深めた。日本文学の最もまばゆい光と最も深い闇とがふたつながら。――そして天皇家はそのいずれも伝承していたのである』ここが文化防衛論、このものだよ、これね」

水島「そうですね」

宮崎「ええ」

水島「ほんと、そうですね」

宮崎「うん」

水島「これ、死とエロティズムって言うかねえ」

富岡「そうですよ、これ」

水島「これは本当に、この辺のところは今、日本の中に無くなっていると言ったけど、中上さんの話が出ましたけど、実は、その部分を持っているんですよ」

執行「あれ、闇だねえ」

水島「まあ、もっと猥雑なものですけどね」

執行「(笑)」

富岡「ちょっと小さい」

水島「そう。まあ、そういう意味では、浅野さんね」

浅野「はい」

水島「三島由紀夫が今、日本のこれからに与える一番の力というのは何でしょうね。政治的なものとか分けなくていいんですけど、どうですか」

浅野「あのう、政治も含めて、日本を守るものが政治だとすれば、澤村さんも三浦さんもおっしゃっているんですけど、人間の、まあ、日本の、と言ってもいいですが、その古層から連続して続いているものを、いかに守るかということを、三島さんは、ずうっと願って来たことで、私は、今日、ここに来る前に読んだのが、実は、晩年の作品ではなくて、全集の1巻と2巻を読んで来たんですよ」

水島「うん」

浅野「というのは『仮面の告白』までの『酸模』から『盗賊』までですけど、そこに自分が正に蓮田善明が言った様に『悠久の日本の歴史の大義の申し子である』ということ、自ら、たらんとした生きざまが、その文学の中に、もう、はっきりと出ているんですね。それが結局、収斂していったのが最後の行動になっていったんじゃないかなあという風に考えておりますね。ですから、歴史の連続性としての天皇というもの、民主主義っていうものは過去の人間も含めた人達の意見を汲み上げた民主主義でなければならないという風に、三島さんは考えていたと思いますので、そういったものが恐らく日本の中で浸透して来つつあるんじゃないかなと」

水島「ああ」

浅野「それは自民党の失速って言うのが、ある意味では Own Goal みたいな形になったと思うんですね。決して参政党がいいとは思いませんけど、自民党より右が出て来たっていうこと、それを容認する社会になったということが、そのひとつの表れでないかなあと思っています」

水島「そうですねえ。やっぱり何をやってもインチキだったっていうね」

浅野「はい」

水島「今、若い人は、そういう感覚を持っていますからねえ」

浅野「はい」

富岡「それは、やっぱり若い人にはあるでしょうね」

水島「うん」

富岡「いや、彼らは、そういう言葉を知らないけど、所謂、55年体制っていうやつがね、いかに嘘だったかっていうのを、本能的に、やっぱり…」

執行「本能は掴んでいるんだよねえ」

富岡「本能的に掴んだと思うんですよ」

水島「うん」

執行「だから研究しないですね、もう」

富岡「そうそう、そう」

執行「苦悩しないから」

富岡「そうそう、そう」

執行「そこが残念なところ」

富岡「まあ、それが崩れましたからね」

執行「ああ」

水島「それを言っていたのが三島由紀夫ですよ」

執行「はい」

水島「はい」

執行「でも70年って、やっぱり節目ですよ」

水島「はい」

富岡「そうですね」

執行「あの時から、もう日本が直さないと、って言うと、あれだけでも、もう酷い方向へ行っちゃったよね」

富岡「うん」

水島「いや、あのう…」

執行「だから三島先生があそこで命を懸けられたっていうのは凄く解りますよね。もう、本当にどっちに行くか、日本らしさに戻っていくかの境目ですよ」

澤村「結局、70年って確か1月に総選挙があつてね、自民党が大勝したんですよ」

執行「そうそう」

澤村「相当、四十何パーセントかな、つまり戦後の安定的な社会が、むしろ生まれる」

水島「うん」

澤村「自民党という曖昧な右と左を混淆したような勢力で、そこに三島さんは先鋭的な、70年って機が起こるっていうね、もう、そのところで乖離が起きているんですよ」

水島「うん」

執行「そう」

澤村「その乖離のまま三島さんは亡くなってしまったんだけど、それで伏流していったと思うんですね、時代の底のところにね」

水島「うん」

澤村「それが今、ぽっと出て来たような感じを、私は受けるんですよ」

執行「はい、はい」

澤村「三島さんの言っている事が、やっぱりタイミングが凄く悪かったと思うんですね」

水島「あれで全共闘の運動とか、ざわざわしていたものが一切、収まったんですよ」

澤村「そう。あれは、もう左翼も負けましたから」

水島「はい」

執行「あれから急に無くなっちゃったよね」

澤村「無くなりました。あと色々内ゲバ、内ゲバとか、あれで若者は行かなくなっちゃったんです」

水島「うん、内ゲバだけになったんですね。あとは、先鋭的に…」

澤村「そう」

水島「変なテロリストになってとかね」

澤村「そう」

富岡「ただねえ、74年か75年のね、この間、鎌倉の病院で死んだ桐山聡はアジア反日武装戦線。あれはちょっと別で、マルクス・レーニン主義じゃないんですよ。うん。まあ、あまり、ここで言ってもしょうがない。やっぱり彼らの先鋭なアジア主義みたいなのが非常に面白かった。ただ、あれも一網打尽になりましたからね」

澤村「だから反日と三島さんの的なものがマイナーになっていったんですよ」

富岡「そうそう、そうそう」

澤村「戦後自民党的な政治がメジャーになって、誰もがそこにOKっていう感じをやった時代に、丁度、ずれるように、三島さんは結構やったっていうのが非常にアイロニカルだし、何か象徴的だしね」

富岡「まあ、あの70年がギリギリだったんだと思うんですよね」

澤村「うん」

水島「それと、やっぱりね、共産党が60年代に全学連が出来たようにね、全共闘の時代は、そういう連中が体制をぶっ倒すというね、私、覚えていますけど、当時の極左は日本革命とか日帝打倒とかね、よく大学に立て看板みたいのがずらずら並んでいたでしょ」

執行「本気でしたよね、あれね」

水島「そういう感覚があったのが、全部、反動と言われてね、私は革マル派から追い出されたんだけど（苦笑）、私が驚いたのは、私はずう～っと早稲田の文学部ですけど、バリケードをやっていたのが、誰の命令か当然、上からでしょうけど、突然、バリケードを全部、解除って、授業を始めて、あの連中は、みんな、ヌケヌケと授業に出始めていて、お前ら、何なんだっていうね、そういう状態ですよ。だから、こういう人達が運動をやっていたっていうね、運動をやったと言うか、別にいいんだけどね。そういう状態ですから、つまり、あの状態で言うと、三島由紀夫がああいう形になる前は風の状態みたいなね」

一同「うん、うんうん」

水島「大学解体とか言っていた連中も、あそこでワァワァ騒いでいた左翼の大学の教師達も、みんな、おとなしくなってね、そうだ、そうだって言っていたのが、やっぱり秩序が必要だとかね、ああだこうだになって何だか知らないけど収まっちゃったというねえ」

執行「でも、とにかく全部が収まって、全部、おとなしくなったんですよ」

水島「そうですよ」

執行「全員が物質的で、あとは肉体大事の、もう自分が安全ならいいっていう時代にどんどん突入していったっていう」

水島「そう。そういうことですよ」

澤村「今からして、その二つを考えるとね。その反日の勢力と、どちらかと言うと、三島さんが括弧付きの敗者になって消えて行った。消えて行ったと言うか、伏在していったんですが、ただ、今からの視点で見ると、反日をやっていた人って相当、高齢化していると思います。爺様です。そういう人達は、あの時、何を考えて、今の時点で何を考えているのかなっていう感じがするんですよ。」

三島さんの伏在していたのは今、あの時、何を考えていたのという感じはしません。非常にアクチュアルな、終わっていない何かがあるんじゃないかっていう感じがします」

富岡「それは当然、全共闘との何十年後の対話とか何か番組をやってて…」

澤村「それ、見ても分かりますね」

富岡「あいつらが、いかにだらしなかったということが証明された」

澤村「そう。結局、うん。だけど三島さんは違うと思うね」

水島「これはフジテレビのドキュメンタリーだけれども、深夜の1時間もので『25年目の全共闘』という番組が放映されました」

富岡「そうそう、そうそう」

執行「ああ、観た、観た」

水島「観ました？」

執行「観た」

水島「あれは25年目に東大や何だかんだの全共闘をやっていたリーダー達は今、何をしているんだろうと、訪ねて行って、秋田明大とか日大の人とか東大の文学部の人なんかは三里塚で農業をやっているとかね、みんな、真面目に生きていた。ところが早稲田の何か黒ヘルだったかなあ、これは自治労に入って、また、みんなで集まって、もう一回、やり

直そうとか言っていたけど、ぶち殺したくなるっていうかねえ（笑）」

一同「（笑）」

水島「冗談だけど、本当に火炎放射器で焼いてしまいたいっていう（笑）、だから、こういう人達がね、もう25年目だったから、随分、昔ですけどね、こういう人達が入ったのと、もう一つはシラケ世代っていうのになって、つまり生活に戻ろうみたいなね。穏やかな、という、これは、もう、それで敵も何も無い、それこそ三島由紀夫が書いた『のっぺりと無機質な』、そういう社会で、自民党が勝っちゃって」

富岡「それで儲けたのは糸井重里ですよ」

一同「（笑）」

水島「そう（笑）美味しい生活」

富岡「美味しい生活」

水島「丁度、バブルでね」

宮崎「糸井重里って誰ですか」

富岡「美味しい生活（笑）コピーライター」

水島「コピーライターでね、美味しい生活っていう」

執行「吉本隆明と親しいよね。糸井ねえ」

富岡「色々やったから」

水島「そうそう、そう。それで吉本隆明もコム・デ・ギャルソンなんか着ちゃってね」

富岡「そうそう、そう」

水島「そういうことをやっていたんだけど、ただ本当にそういうのを見た時、敵が居なくなっちゃったって、実際はグローバリズムが相変わらず占領軍として、ずっと居た訳だけど、例えば左の方がね、反帝国主義とか反スターリン主義とかいうことを、うちの大学でもやっていたけども、こういう意識が全部、きれいサッパリ全く…」

執行「あれ、突然だからねえ」

水島「無くなるのかっていうねえ」

執行「あれ、三島事件から突然ですよ」

宮崎「いや、あのね、象徴的な話を一つ申し上げますとね、三島事件の直後に、早稲田の正門に、どでかい看板を掲げて…」

執行「もう死んで直ぐに」

宮崎「ええ、あの事件の翌日から直ぐに」

水島「はい」

宮崎「そこに焼香台を置いたの。それでねえ、日頃、看板をぶち壊しに来る革マルだの何だの、みんな、焼香に来たんだよ」

執行「ああ、そう」

水島「ああ、そうかあ」

宮崎「ここですよ。あれで、もうね、完全に左は敗北宣言です」

水島「そう」

執行「だから、やっぱり、それは三島先生のああいう決意にあるでしょう」

水島「結局、みんな、負けたと思ったんですよ」

執行「あれから凄く変わりましたよ。左も右も誰でも感じていると思う。もう共産党もあれから物凄く大人しいよね。何か殆ど消滅になっちゃっているよね（笑）」

水島「つまり、ただ、そのね、だから三島由紀夫は戦う相手を左翼だと思っていたら、碌な左翼が居なかった」

執行「はい」

水島「この恐ろしい状況をね、右も左もみんな駄目だったっていう状態で、ああいう風に自決を選ばざるを得なかったっていう、あの孤立、孤独というのは相当なものだったと思うんですけどね。まあ、こういったもので、じゃあ、三島由紀夫が守ろうとしたものの自体は、実際、一体、政治制度だったか、つまり私は、でも彼の生き方そのものを伝えるっていう、自分を相当、意識為さっていたんじゃないかっていう気がするんですけどね。後半も続けて議論してみたいと思います。はい、一回、お休みさせて戴きます」
一同「(礼)」

<後半>

水島「後半に入りました。先程、ちょっと言いました三島由紀夫が自決なさった3か月前にサンケイ新聞に載った『のっぺりと無機質な、富裕な』ああ、これですか、宮崎さん、有難うございます。じゃあ、ちょっと…」

浅野「果たし得ていないやつ」

富岡「果たし得ていないですね」

水島「はい。『私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本は、なくなって、その代わりに無機質な、からっぽな、ニュートラルな中間色の富裕な抜目が無い、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである』と。7月7日のサンケイ新聞に『果たし得てゐない約束』、その中の文章に、こういうのを書いているんですね」

執行「夕刊だったかな」

水島「正に、これは、どなたも、よく言うんだけど、この通りになっているんじゃないかと。あまり『富裕な』というのだけ、ちょっとね、最近、貧乏国になりつつあるというのはありますけど」

一同「(苦笑)」

執行「でも、未だ、そんな貧乏では。はい」

宮崎「経済大国も返上しちゃっているから」

水島「ねえ。そういうところがありますけど、それ以外は殆どこういう形の、もう…」

執行「殆ど当たっていますよ」

水島「当たっていますね。こういう中で自決を為さったっていうね」

執行「僕はね、三島先生が自決してから、ずうっと考えていますけどねえ、経済とか政治でね、あらゆる評論家が10年後、20年後、30年後と予測している。本に、よく出ているのは興味があるので殆ど読んでいるんですが、まず殆どねえ、一つとして当たっているのは無いですね」

水島「ああ…」

執行「うん。それがねえ、三島先生があの新聞の夕刊に出された、これ。まあ、基本的には十何項目もあって全部、当たっていますよ」

水島「うん」

執行「これねえ、僕は三島先生が文学者として持たれていた予言能力っていうのかなあ、その予知能力」

水島「そうですね」

執行「もう一度、この55年を機に、生誕百年を機に考え直す時期に来ているんじゃない

かと思って、まあ、そういう思いもあって、この本も上梓したんですけども」

水島「はい。とにかく『このまま行ったら「日本」はなくなってしまうので』という、この「日本」というのは国の名前とか土地じゃなくてね」

執行「そうですね。文化です」

水島「日本の実質が無くなってしまうということですけど」

執行「でも、最近、本当に殆どの表現が、祖国とか日本人とかいうのが無くなって来て」

水島「うん」

執行「日本列島になっていますもんね」

水島「そうです。北海道なんか今、もう日本の地図で白部分になっていますから。つまり日本の領土じゃない訳ですよ」

執行「えっ、そうになっているの」

水島「教科書はなっていますよ」

執行「ええーっ！」

水島「東京書籍の教科書は」

執行「どうしてえー（苦笑）」

水島「えっ、いやいや、北海道は江戸時代までアイヌの時代だって言っているんですよ。これ、嘘ですよ、嘘ですけど」

執行「ええーっ…」

澤村「そうか、そうか」

水島「明治の政府が北海道を領有したと」

執行「ああ…」

水島「これ、嘘ですよ」

執行「はい」

水島「ちゃんと松前藩が、しっかりと」

執行「松前藩がですよねぇ」

水島「ええ。もう間宮林蔵だなんだって、みんな、樺太やあっちの方へ行って、みんな、やっているんだけど、今の教科書は本当にそうになっています」

執行「それを言うんだったら、アメリカだって違いますよね」

一同「そう」

浅野「全ての国際秩序が全部、そうなりますもんね」

執行「そうそう」

水島「そういうことです。自分達の国で、自分達の国じゃなくしているっていうね」

執行「ただねぇ、テレビの論調を観ているとねぇ、昔みたいな日本人とか日本文化っていう捉え方が本当に急激に無くなって来て。『日本列島』とか『この列島に住む人達』とかね、そういう表現を執っている人がねぇ…」

水島「うん。結構、多いですね」

執行「要するに知性人と言われる人で、本当に多いです」

水島「うん。それと、まあ、これは悪意がないだろうけど『この国』って使う人が本当に増えましたね」

執行「そう」

水島「『我が国』って言わないんですよ」

執行「『祖国』とか『我が国』とか『日本』とかねぇ、はっきり言わないんですよ」

宮崎「いや、『この国』って言い出したのは司馬遼太郎です」

水島「そうですね」

執行「司馬遼太郎ですか」

宮崎「『この国』。今の北海道の空白の問題は、アイヌを先住民族と認めちゃった時から…」

水島「そうなんですよ。全くおっしゃる通り」

宮崎「そうしたらプーチンが悪乗りして来てね、ああ、それならば、アイヌはロシア人、ロシアの先住民族だと（笑）」

水島「そう、千島列島も樺太もね」

宮崎「もう、全然…」

水島「みんな、先住民で」

宮崎「めちゃくちゃな論理になっちゃったね」

執行「それを言ったら、世界中、めちゃくちゃですよ」

宮崎「うん」

水島「だからロシアの狙いは、北海道の北半分を領有する事です。アイヌのものだということ。アイヌが先住民だということ。だから、まあ、ちょっと、これは、何処まで確かか判りませんが、北海道の元道議の話だと、北海道の南半分は中国がやたらと土地を買っている」

一同「うん」

水島「それで北の方は宗谷岬の部分だけを除けば、あとは殆ど買っていない。だからロシア用に残しているんじゃないかっていうね」

一同「え〜…」

水島「とんでもない話だ」

宮崎「いや、あれは北極航路ですよ」

水島「ええ、そうです。今、狙っているのはね」

宮崎「中国は今、砕氷船を造って北極ルートを大体、完成しちゃったから」

水島「そうなんです」

宮崎「そうすると、北海道の、謂わば、何て言うの、この南側の…」

水島「苫小牧とねえ」

宮崎「えー、東側」

水島「はい。それから釧路」

宮崎「そう」

水島「これが全部、燃料、水、食糧の供給港。釧路は市長が北海道で一番、親中市長という話ですね」

執行「でも、今、これが三島由紀夫の言っていた『日本』という国がなくなってしまうっていうのは、こういう状態ですよ」

水島「そういうことです」

執行「だから、この列島と土地はあっても『日本』という国が無くなっちゃっているっていう状態に近いんじゃないかと、僕は思う」

宮崎「いや、鳩山首相が言った様にね『日本列島は日本人だけのものではありません』と言ったじゃない。総理大臣が言ったんだよ」

執行「そんなこと言ったの。知らなかった」

宮崎「そうですよ。あいつは（苦笑）」

執行「ええーっ！」

水島「本当に言いましたよ」

宮崎「もう、あれから完全に狂っている」

執行「狂っているねえ」

水島「まあ、そういう国になっちゃったですねえ」

澤村「その土地の問題っていうのは、かなりナショナリティっていうのを伏在させているのをばあ〜っと出すんですよ。だから、やはり竹島の問題とか他にも色々ありますけど、相当、隠された力っていうのを表に出す力があるんでね。だから、もし北海道がそんなことになったら、国民は絶対に許さないと思いますね」

執行「そら、そうだよな」

澤村「まあ、あのう、いや、っていうか…」

執行「そういうことになっている」

澤村「いや、憲法を変える力になるとか、それは直ぐに、そうなると思うんですね」

水島「今日は、もうちょっと格調高いと思ってね、そんなことを話すつもりもなかったけれど、現実には中国が今、こういう形でやっているっていうね、そして去年のアメリカから始まった Japan's Holocaust っていう本を大量に発売してね」

宮崎「うん」

一同「うん」

水島「まあ、あること無いことじゃない、無いことばかりを、日本人は3千万人以上のアジアの人を殺したというね。こういうキャンペーンを、アメリカから始めている。それで中国では、さっき出たかも判りませんが『南京写真館』という映画と『731』という非常につまらない、とんでもないインチキ映画ですけど、でもこれを上映して『731』の方は当たっていないらしいですけど、この『南京写真館』の方は相当、つまり何か日本兵が赤ん坊を地面に叩きつけるとかね、もう見ていてビックリするような映画を作っているっていう中で、やっぱり我々の国が今、そのまま、この状態になっていて、日本ということが、あまり意識されていない。

やっと移民の問題とか、そういうところで少し日本という国というか我々の国、祖国とか我が国というものが意識をされ始めてはいるというね、そういった時、三島由紀夫のね、あれは、やっぱり、どうですか、あれは本当に昭和の終わりだと思いますね。それから、完全にグローバリズムに行く、構造改革へ行く、その後バブルがはじけて…、三島由紀夫の死というのは、本当に転換点になっていたっていうね」

執行「だから三島由紀夫さんの死は、さっき言った様に非常に論理的に組まれている死であると同時に、詳しい事は僕も判りませんが、あの死があった時期ですよな」

水島「うん」

執行「1970年。あれからの転換っていうのが、偶然とは思えないんですよ」

水島「はい」

執行「あれから本当に全ての思想も無くなって来たし、もう何だろう、悪く言えば肉体があればいい、それから、その日の暮らしかあればいいっていう、どちらかと言えば、これは世界的に、そうなっていますよね」

水島「それなんです」

執行「特に日本は酷くなっている」

浅野「特に『ガイヤ』っていう言葉が使われ始めた時から…」

執行「はい」

浅野「世界が全部、コスモポリタンに向かっていこうとしているんですけど、結局、あの人達の最終的な目的っていうのは何ですか。国家を解体して」

執行「やっぱり人類の家畜化ですよ。人類の民族性っていうのは個性じゃないですか」

水島「世界政府っていうか、まあ、一種のトロツキズムっていうか」

執行「はい」

水島「そういう形で国際金融資本とかね」

浅野「ええ」

水島「国境の無いイメージですよ。だから他民族共生とか多文化共生とか、それこそ、三島由紀夫はナショナリズムでも何でもね、これを徹底した時、初めて普遍的なものが見えて来るってというような立場だと思うんですけども…」

浅野「はい」

水島「全く逆ですよ」

富岡「だから冷戦崩壊後もね、やっぱりマルクスの亡霊達がね、いっぱい、色んな形で…グローバリズムというのは…」

水島「そういうことですよ」

富岡「マルクスも完全に亡霊ですから、と言うか、まあ、そういうのが、ずうっと、ジェンダー論もそうですよね」

浅野「既存のキリスト教があるということは全く無いですか」

富岡「う～ん、それは、ちょっと判らないですけど」

水島「う～ん、キリストっていうか、あのう…」

執行「あったら利用されている」

水島「利用する価値観と言うかね、キリスト教でも色んな、例えば、今、トランプがやっている福音派っていうのは1万何千万人も居る宗教団体で、あれは、やっぱり、まあ、かなりキリスト教の中では変わったって言うとおかしいけど、普通のキリスト教徒ではないですよ」

執行「はい」

富岡「だって、元々アメリカはピューリタニズムですから」

水島「うん」

執行「ええ」

富岡「つまり新大陸に神の国を創りたい」

執行「創りたいからね」

富岡「創りたい。つまり人間の力で神の国を創って、キリストの再臨を待つっていう」

執行「うん、そういう理想をねえ」

富岡「まあ、前千年王国論」

執行「はい」

富岡「後千年王国論ってあるんですが、基本的にそういう考えで、これは、もう、はっきり言って本来のキリスト教じゃないですよ」

水島「それで言うとイスラエルの方もね」

執行「はい」

富岡「つまり人神思想ですよ」

執行「はい」

富岡「だから人が神になって神の国を創るっていうのは、完全に倒錯した宗教感覚で、同じ様にソ連というのはプロレタリア・メシアニズムですよ」

執行「はい」

富岡「だからソ連とアメリカ合衆国は、つまりキリスト教の倒錯、ひっくり返っちゃった人神思想の対立だった訳ですよ。だから同じな訳ですよ。形として…」

執行「うんうん」

宮崎「いや、結局、一神教の地域でしか、そういう発想は出て来ない」

富岡「はい、出て来ないですよ」

宮崎「日本は多神教だからね、そういう意味で、どうやってということ突き詰めていけば、結局、一神教の発想のパラダイムで全ての事が運ばれている」

富岡「うん」

執行「運んでいますねえ」

宮崎「だから Kommunismus に変わって Globalismus」

富岡「そうなんです」

宮崎「その発祥元は何処だって言うたダボスですよ」

富岡「うん」

執行「う〜ん…」

宮崎「ダボスに怪しげな人達が集まって、それで世界の方針とか何かを、あそこで、みんなが決めたら、日本から証券会社だの銀行だのが行って、ああ、今度のテーマはこれだ、気象だとかね（苦笑）、地球温暖化だって、そういうことでビジネスをやる訳ね。株はその銘柄を指定したら売れるしということで、ダボスは Aristocrat じゃないけど、今、これをダボスクラットって言うんですね。それが今、未だ日本に残っているっていうか、未だ影響を出している」

執行「だから本当の資本主義を止める力がね…」

澤村「いや、その前の話でね、サンケイに載った『ニュートラルな、無機質な』っていうのは、正に高度経済成長時代のことですよ。9割は中流で凄く豊かな、誰でも家が持てるし、車も持てるし、本当に豊かな生活が出来たっていう、あの高度経済成長っていうのは、学者によって違うけど、55年ぐらいから20年ぐらい続いたので、丁度、その最後ぐらいのところで、まあ、そのようになって、そこから時代が二回りぐらいしていったと思うんですね。

それで Globalismus の問題って確かにあって、それが最後には、トランプの登場とヨーロッパに於ける保守派が伸びて来る。日本でも高市政権が成立した。参政党が伸びる。これは、更にそこから、また回転して、もう Globalismus とか中流中心の社会っていうのは凄くリアリティが無くなって来たっていうのが多分、一般大衆が掴んでいると思うんです。

そこで三島が浮上する、復活するってなるんですよ。それでねえ『文化防衛論』の中で、彼は端的に書いているんですよ。何故、そういう時に民衆が浮上するか。要するに人間は根無し草に耐えられないからだって、単純に言っているんですよ。つまり中間とかニュートラルっていうのは、根無し草に生きようじゃないか、楽しきやいと。それで、正に、サブカルとか、大体、そういうのは、それは豊かだったからですよ」

一同「うん」

澤村「それが、もう下が崩壊して来て、あとは剥き出しの世の中になると、根無し草っていうのが、もう耐えきれなくなってくるんですね。そこに55年の時間を経て、三島さんの考え方っていうのが多分、何処かで結びつき合っ出てくる可能性っていうのはあると思いますねえ」

富岡「いや、そう考えますね」

執行「もうね、時代ですよ」

富岡「ニヒリズムですよ」

澤村「うん、そう」

富岡「根無し草の形をとっているニヒリズム」

澤村「そうそう、そう。それでねえ、『文化防衛論』っていうのは守るという意味ですけ

ど、一体、何を守るのか。今の議論の前提に、何を守るかっていうのは凄く単純ですけど、何に対して戦うかっていうことと、論の立て方が近いと思う訳ですよ。戦う相手が見えて来ると、こっちが守ろうとする何かってあるんですけど、これねえ『我が自主防衛』という三島さんが書いた文章の中に面白いものがあるなと思って、彼は自衛隊の事を書いているんですけど、ちょっと象徴的な受け取り方が出来るんですけど、要するに間接侵略と戦うんだって言っている訳ですよ。

間接侵略っていうのは、表面的には外国勢力に操られた国内のイデオロギー戦のことだが、本質的には少なくとも日本にとっては、日本という国のアイデンティティを侵そうとする者と守ろうとする者との戦いだって言うんですよ。国内戦だと言っている訳で、国内に今、保守 VS リベラルというのは何処の国でもあるし、日本でも多分、これから、本質的に出て来ると言うんですね。

これまではリベラルは優位だった。それを多分、この間接侵略に対する一番、戦わなきゃいけないのは間接侵略であって、アイデンティティを守る為の戦いだって、そういう発想っていうのが凄くリアルな感じが今、するんですね」

水島「いや、そうなんですよ。だから、あまり右とか左って言う以前にね」

澤村「そう」

水島「今のアイデンティティを守るっていうのは一番の問題は、ここの段階では、みんな日本人ですよ、日本に居るのが。今、移民をどんどん入れているでしょ」

澤村「そう」

水島「380万人ぐらい入っている。これから1千万人を入れるって言っているでしょ。だから、これは今、埼玉とかでクラスの半分ぐらいが外国人とかね、こういう所が、どんどん出始めている。言葉が解らない。日本語がどんどん痩せ細っていく。このことを見た時、おっしまったように間接侵略っていうね」

澤村「そう」

水島「こういう者に単に土地を取られるとかじゃなくて、移民そのものが日本侵略の一番の…」

執行「文化を取られちゃう訳ですね」

水島「そういうことです」

執行「文化を」

澤村「アイデンティティをね」

水島「アイデンティティをね」

富岡「だから、今、社長がおっしまったように日本語が痩せ細ってね」

水島「そうです」

富岡「うん」

執行「どうとなりね」

富岡「うん」

澤村「でも、本当に天皇制が無くなったら日本じゃないですよ、この二つは絶対に守らないと」

水島「いや、それが今、もう定期的に、ずうっとね、週刊新潮とかやっているし（失笑）」

富岡「いや、今の学生は日本語が書けないですよ」

浅野「書けないですね」

富岡「うん」

浅野「今の若い人」

水島「だから、これねえ、本当に教育がねえ」

浅野「全く、その通りです」

富岡「いや、本当に書けないですよ。これは現場に居ると驚嘆しますよ。俺も、そんなに書ける方じゃないけど（笑）、まあ、本当に驚嘆しますよ」

水島「うん」

富岡「日本語が書けない」

水島「いや…」

澤村「書けないと言うか単純なことしか書けないです。複雑な日本語の表現は出来ない」

富岡「読めない」

水島「読めない、書けない」

執行「それは文章が下手っていうことですか」

澤村「まあ、要するに解り易過ぎるんですよ。単純な」

水島「だから非常にデジタルな中でね、音楽と、例えばアニメーションみたいなね」

澤村「うん」

水島「こういうものってというのは、やっぱり解り易いし、今、もうXだとねえ、1分以内でないと駄目だっていう（失笑）、こんな、3時間もやっているのは駄目だっていう」

富岡「中国からねえ、日本文学を勉強に来ている留学生の方が日本語、読めます。漱石の『草枕』を両方に読ませたら、日本人は、どんどん詰まっちゃって読めない。漢字が読めない。それで留学生はスラスラって読みますよ」

水島「ああ」

執行「言葉もそうですよ。BSで政治討論があるプライムニュースというのがあってね、たまに観るんだけど、出て来る日本人の学者が殆ど何を言っているか解らない人ばかり。世界情勢でも一番、解り易い人は、日本語べらべらだけど、アメリカ人ふたり。ちょっと名前を忘れちゃったんだけど、アメリカ人ふたりが出て来る。日本の大学で教授していますけど、この人達の日本語が一番、聞いていて解る」

水島「ああ」

執行「最近、恐ろしいね」

水島「いや、本当にそうです」

執行「日本人はね、知らない内に喋り出してねえ、知らない内に語尾が無くなっちゃうみたいだね、何か解らないのよ」

水島「やっぱり、日本の場合ね」

執行「うん」

水島「歌心ってというか、よく万葉集から古今、新古今、ずうっと、こういうものを、まず本当に朗詠する」

執行「う～ん」

水島「それと、もう一つはね、前にも別の討論で言ったんだけど、敗戦の時、終戦の時に、我々は『国敗れて山河在り』と。『夏草や兵どもが夢のあと』というのと言わないで、やっぱり『国敗れて山河在り』という言葉思い出す。つまり我々の言葉の中に、漢語と日本語、歌の五七五七七とか。こういうものが全部、ちゃんと纏まっていたのに、ただ、これは別に中国の真似っこじゃなくて、書き下し文って言うか読み下し文というのか、こういう形で読めるように漢字を、漢詩をやっていたような、こういう3つの文化をきちっとやれたって言うことが、無くなっているんですよ」

富岡「無くなっています。だって、もう小学校低学年から、こんなタブレットやっている訳です」

水島「ね」

富岡「IT企業が献金して、みんな、文科省は、それを入れる訳じゃないですか」

水島「そうですよ」

富岡「うん」

澤村「だから日本語表現って主語が無いでしょ。海外のものは主語があるから、中国もね。あれって、相当ねえ、何て言うのかなあ、ちゃんと古典を読むとか、そういった過程を経ないと培えないんですよ。やっぱり英語の教育をやり過ぎだと思うんですよ。そこを直して教育から改革していかないと、今の言葉の問題というのは、本質的には解決しないと思いますね」

富岡「解決しないですね」

澤村「だから、次の世代に期待するしかないですよ、これも過程ですからね」

富岡「この間、文化功労賞を受賞した水村美苗さんが『日本語が滅びる時』っていう名著を書かれてね」

一同「うん」

富岡「正にねえ、もう随分、前ですけど、もう、それは、そのう…」

水島「英語になるっていうんだよね」

富岡「もう完全に、あのう…」

水島「私、読みました」

富岡「今ね、あれだという状況ですね」

水島「例えば丸谷オーさんとかね、エッセイが大変、面白いんだけども、日本語の教育の話も、私は何処かで読んだことがあるけど、ごく当たり前のことを普通に小さい頃から教えていれば、そんなに難しくないです。教えていないんですよ」

富岡「教えていない」

水島「子供の時が一番、大事なのに」

富岡「だって、画面をずっと観ていればしょうがないじゃないですか」

水島「う〜ん」

富岡「ペンを持って、こうページをめくるっていうことがないですもん」

水島「う〜ん」

澤村「事態は割と深刻ですよ。日本語を教えるというのはね、教える先生が充実しなきゃいけないし、そこの二つぐらい前から、もう崩れているね」

富岡「だから通常の日本の学校へ行っている以上、真面目な日本人は出来ないですね。だから日本の教育制度からドロップアウトして、何処か独学で勉強するとかね、色々なことを考えないと、通常の小学校、中学校、高校、大学へ行っていたら、まず駄目ですね。私も関わっているんで、大変な責任を感じていますけども」

執行「でも、やっぱり、家庭だよな」

一同「うん」

執行「学校っていうのは、やっぱり家庭があって、家庭の中で、もう好き勝手にしてものを教えられない人が来たら、先生は対処できないよね」

水島「それと、やっぱり教科書とか、そういうのが、きちんとした名文と言うか…」

執行「そう」

水島「いい文章をちゃんと小さい頃から教えるっていうねえ」

執行「そうそう、そうそう。だって、やっぱり文学とかねえ、色んな良い文章に触れるのは、みんな教科書が最初だもんね」

澤村「そう。だから、私は保田與重郎の『規範国語読本』っていうのを、国語の教科書にしろと思っているんですよ。やっぱり、とにかく文章が本当にいいんですよ」

執行「保田與重郎でも今、読める人が、もう殆ど居ない」

澤村「居ないです、居ないです。だから、保田と折口は読めなくなっちゃっている訳ですよ」

執行「はい。そう」

澤村「一方、村上春樹とか、まあ、三島さんもそうですけど、文章が明晰だから読めるんですよ」

執行「まだね、三島由紀夫っていうのは明晰だね」

澤村「明晰です」

執行「それで、まだ読めるんですよね」

澤村「うん。まだ読めます」

執行「う〜ん」

水島「だから、いいチャンスですよ。まあ、解り易いっていうことはないけども、あの『潮騒』にしろね、そういう普通に、三島！っていうんじゃないね、あれも三島的だけども、でも、ああいうものから、ちゃんと入って行くとか、何かねえ、とにかく、いいものを読ませないとね。それと、もう一つ、朗読は本当に必要だと思いますね」

富岡「ああ、必要です」

水島「所謂、論語のあれじゃないけども、本当に日本語をちゃんと読めるっていうねえ、あれは必要ですね。それでね、音声でリズムが解る訳でしょ。だから本当にこういうことがね…それと、もうひとつ、NHKで言えば、みんなの歌ってありますね」

執行「はい。あった」

水島「あれも訳の解らない、今、作った作家の。昔はちゃんと日本の叙情歌とかね」

執行「いい歌だよ」

水島「世界の民謡とかねえ、素晴らしいものを流したんですよ」

執行「世界の民謡で非常に心に響くのはねえ、みんな、あのNHKのみんなのうたで覚えたの」

水島「そうでしょ。我々はそうですね」

執行「そうそう」

水島「同じ世代だから」

執行「スペイン民謡とかね」

水島「そう」

執行「ヨーロッパのポーランド民謡とか、よくやっていたの」

水島「そう」

執行「それで、いい歌は、まず、みんな、あれで覚えるのよ」

澤村「なるほど、なるほど」

執行「それから自分で調べるというね」

水島「私はインドネシア民謡で『クイカイマニマニダスキー、クイカイコウ、クイカイコウ』って、あれも、みんなのうたですよ。ああいう…」

執行「今、漫画みたいな変なのやっているけどね、何か…」

水島「そう。変な歌っていうか、まあ、一生懸命、作っているんでしょうけれども。そういう意味で非常に…」

執行「でも、今の人って唱歌とかなんかは全然、感動しないですよ」

水島「感動しない」

執行「どうなっちゃっているのか僕には分かんないけど」

宮崎「いやいや、大体、カラオケに無いじゃないですか」

執行「ないし」

宮崎「演歌、軍歌、無いですよ」

水島「えっ、軍歌がないの」

執行「唱歌まで、唱歌が無い」

水島「ひえ～」

執行「だって『月の砂漠』なんてねえ、『月の砂漠』は勿論、好き、大好きだけど、あれ『月の砂漠』を知っている若い人は、もう一人も居ないですよ」

水島「ああ、そう」

執行「で、僕はそれを歌ったんだけど」

水島「♪つうきのお～さばくを～♪ってやつですか」

執行「葬式の歌ですかって言われたの」

一同「(笑)」

浅野「まあ、短調ですから」

執行「短調だから」

水島「ああ～」

執行「これは、皆さん、驚くと思うんだけど、本当に日本という国が無くなったっていう感じがあるんですよ」

水島「ああ」

執行「誰も『荒城の月』も知らないんですから」

水島「えっ！」

執行「『荒城の月』を」

富岡「知らないですよ」

執行「殆ど二十代の人までは知らないです」

富岡「知らないです」

水島「じゃあ、教えていないんだ」

執行「教えても居ないし」

澤村「教えていないからですよ」

執行「言葉も知らないし。ただねえ、僕が歌を覚えたのは学校教育もあるけど、やっぱり家族だね」

水島「ああ、それはあるね」

執行「両親とか祖父母」

澤村「先生、家族の崩壊っていうのは相当、深刻ですよ」

執行「うん。祖父母やなんかがねえ、全部じゃないけど口ずさむじゃないですか。やっぱり、あれで古い歌を覚える訳。あれが無くなっているよね」

水島「いやあ…」

澤村「先生の世代は、それが凄く有効だった」

執行「まだね」

澤村「うん。もう相当、深刻だと思います」

水島「執行さんと私がね」

執行「同じだもん」

水島「大体ね。うん、だから…」

執行「だから、まず、それで、うちなんかは祖父母が居たから」

水島「そうだよ」

執行「お婆ちゃんに鉄道唱歌から教えて貰ったからね（笑）」

水島「うちは、お袋が推進兵の歌を歌っていましたから。『乃木大将はあ、おごそかにい〜
』っていうね、三浦さんの時代はどうですか」

三浦「うん、まあ、『荒城の月』とかは学校で習いましたけどね」

執行「まだ、まだねえ…」

水島「三浦さんのところまでは習っているんだ」

三浦「(頷く)」

執行「35年生まれって言うとな僕より10歳下かな。ああ、まだ学校でありますよ。でも
今、芥川龍之介とかは、もう教科書に無いですよ」

三浦「ああ、そうですか」

執行「あと森鷗外も。だから、もう極端に言うとな森鷗外や芥川の名前も知らないでしょ」

富岡「何か、ちらっとはあるらしいけどね。圧倒的に少なくなっていますね」

執行「殆どの教科書は変わっている」

三浦「まあ、これ、やっぱり凄く感じるのは、歌から、ちょっとずれて悪いんですけど、
作品の評価が色々ありますけど、小林秀雄の『考えるヒント』というエッセイ集がありま
すでしょ」

執行「あるねえ、有名なね。昔の入試の定番だよ」

三浦「あれとか、多分、文芸春秋でしたかな、連載だったと思うんですよ。ですからああ
いうのが、やっぱり、ちゃんと連載として成立していたんですよ」

執行「ちゃんと雑誌がやっていたね」

三浦「ええ。保守系の中で、色々批判的に言われている人は正しいのかもしれないけど、
やっぱり司馬遼太郎の小説とかは、中学生だろうがサラリーマンだろうが読んでいた訳で
あって、あのレベルのものっていうのは大衆の中で存在していたと思うんですね。それが
今、崩れてきているのかなっていう気がしていますね」

澤村「編集者が悪いんですけど(苦笑)」

三浦「(頷く)」

執行「ただ、若い人がねえ、若い人はシナリオを知らないよ」

富岡「知らないですよ」

執行「シナリオ、知らないんですよ」

三浦「ただ、ちょっとプラスなことを言いますと、今年は『国宝』という映画が凄いヒッ
トをしたでしょ」

執行「はい」

富岡「はいはい」

三浦「僕は、あれは、やっぱり良かったなと思いましたけどね、うん」

執行「画期だよな」

三浦「うん、あの映画に対して色々賛否両論があるかもしれませんが、やっぱり、僕は
観に行って、それこそTikTokですか、あれは30秒ですか。そういうのしか観ない、もう
映画も早送りで観るって言われていた若い世代の人が、まあ、アイドル人気かもしれない
けど、3時間、座って観て、結構、感動している風景を観て、まあ、やり方によっては、
復元できるんだなっていう、そんな気にはなりましたけどね。

ただ、今、ここで皆さんがおっしゃっていたような、家族同体とかそういう中で復元する
のは難しいので、何か別の枠組みを考えなくちゃいけないのかなとは思いますがね」

執行「そうですね」

三浦「あと、ちょっと話をずらして悪いんですけど、さっき宮崎先生が『日本文学小史』
の中で、天皇についての三島先生の文章を出して下さいましたけど、今日は、もう時間も

無いし、それを議論することも無理だろうけど、私は勿論、男系護持とかは大切な事なんですけど、もし日本っていうもので、一番、危機があるとしたら、日本語と同時に皇室の語られ方が今、最悪なことになっているような気がしますね」

水島「うん、そうですね」

三浦「うん。僕は、そこがこのまま、別にイギリスの悪口じゃないですよ。例として言っているだけです。今の流れで行けば、イギリス王室みたいな語られ方に多分、落ち着くんでしょうね」

水島「それは、今、狙いでやっていますよ。うん」

三浦「うん。私は、そういう時代が来てしまうならば、それは、まあ、ともかくとして、正直、言って、これは保守の中ですら、そういう風に語る人の方が今、多数派だと、僕は思っています」

執行「そうですね」

三浦「やっぱり、その問題というのは結構、日本語の根本に関わって来る問題じゃないかと思うんですよね」

富岡「うん、だから『文化防衛論』というのは天皇防衛論ですからね」

執行「そうだね。天皇に対する考え方」

三浦「うん」

澤村「これだけ平気で言論が出て、それが天皇に対しても言えるという状況は、非常に危険だと思いますよ。日本語をどうするかっていう観点からも危険だし、やっぱり私は日本語と天皇制っていうのは、これが無くなったら日本じゃなくなっているの、日本人みたいな顔をした人がある列島に沢山居る」

執行「日本語の発展というのは、天皇を語る方の発展ですからね。歌もね」

澤村「それが今のネット社会の奔放な言論が、どういう影響を及ぼすかっていうかねえ、もう、そろそろ深刻に考えなきゃいけなくなって、何か法律を通さなきゃいけなくなって来る可能性があります」

執行「これはねえ、我々国民側の考え方もあるんですけども、何て言うんですかねえ、天皇陛下の教育とか、天皇陛下の在り方、自分達の。それも、やっぱりねえ、考え直していかなくちゃ駄目だと思いますね。開かれた皇室とかね、民主主義的な皇室、ああいうものを推進していく限り、僕が一番、思うのはね、天皇家、天皇、まあ、皇室側にも自分達を日本の伝統の特種なものとして、責任というのかな、日本の歴史を背負った責任というのを天皇家側の人間も、もっと自覚しないとイケないと思う」

三浦「ごめんなさい。ちょっと一言だけ言って、もう、これで、私は黙りますけど、先程から新しい改革派の保守と言うか、今、そういうのが生まれて来て、まあ、名前をはっきり出さないと卑怯になるので、参政党っていう言葉を使いますが、参政党でも日本保守党でも、私は意義があると思います。認めるべきところもいっぱいあると思うので、そういう文章も書きましたけど、私は、ああいう人達の中に、三島由紀夫的なものって微塵も感じないですね。そして大変、無礼なことを、これから言いますが、僕はあの方々の中に、日本文化とか皇室とかを感じた事が無いです」

水島「うん」

三浦「それが保守の、それが出て来たことが、もし日本の政治を良くしていくっていうことになるんだったら、非常に危うい面もあると思うので、それはちょっと言っておきたいです」

水島「全く、あのねえ、簡単に言うと、例えば参政党の場合、私は直接、神谷さんという人と、うちのメンバーも議論したから解るけど、最初は女性天皇って言っているの」

三浦「ああ、そうなんですか」

執行「そう言っていた」

水島「それで、なんだ、これって言ってね、男系男子じゃないのかって言ったら、そうしたら男系って言い出した。これは愛子内親王殿下をイメージしていたんですよ。それで、じゃあ、何？男系だけかいと。男系男子じゃないのかって言ったら男系男子だって言ったの。男系男子だけかい、宮家復活とか旧宮家の復活とかそういうのを考えないのかと言ったら、突然、ばあ〜んといっちゃって旧宮家の復活だあ、男系男子だあ、おまけに側室制度だあって言い出したんです」

一同「(苦笑)」

水島「おいおい、おいおい、そこまで行くかって言ったら、そこがミソですよ。元共産党で転向してない篠原常一郎っていう奴が、神谷君の所へ乗り込んだって言うんですよ。そこは乗り込めるんですよ。直接、会って、お前は昭和天皇が否定した側室制度を認めるのかと言ったら、ああ、間違っていました、やめますと。このぐらいの程度ですよ。三浦さんが今、言った様に」

澤村「そうそう。相当、危ういんですけどね。ただ私はそれで全否定するのはどうかと。じゃあ、他に何があるのかっていうことですな。どんなものでも、そういうところから、そういう次元から始まっているし、大衆的な選挙の中で出て来た訳ですから、知識人とか意識の高い人の運動じゃないので、そこは、ある程度、含んだ上で余裕を持って見た方がいいと思うんですな」

水島「うん、あのう…」

澤村「このまま、今のままじゃ、全く駄目だと私も思うんですよ」

水島「余裕を持って見るのはいいんだけど、彼らはちゃんと、そういう風にやるから、そういう風にならなくて行くんですよ」

富岡「うん」

水島「言わないと…」

富岡「だから、その余裕で変わって来る…」

水島「そのところを、ちゃんとやっておかないと」

澤村「そう、変わってくるような契機っていうのはありますから」

富岡「下手すると、それは突撃隊とかナチスになっちゃう」

澤村「だから、そこをどう持っていくかは、これから誰がどう関わっていったってですね、ああ、現実の政治勢力ですから、我々みたいにこういう所で話すのとちょっと違うので、そこは、やっぱり、色んな不確定な要素っていうのはあると思うんですよ」

水島「はい、どうぞ。はい」

浅野「大衆の心を掴むっていう意味では、一つのテクニクとしてはありかなとは思ったんですよ」

水島「今回、参政党と国民民主党が支持を得たのは、やっぱり、ちゃんと移民反対とか、こういう保守的な色合いとかね、手取りを増やすとか、みんな、貧乏しているだろうって、そっちを言っていく」

浅野「はいはい、まあ、解り易いですけどね」

水島「こういうものに受け皿として、その感性がちゃんとあったからですよ」

浅野「うん」

水島「まあ、細かいことは言いませんけど、そういうところがあって、自民党が、それに応じられなかったっていうことがあると思うんですけど、今言った皇室の問題について、私は最近、言っているんだけど、この国は一体、誰の国だと」

執行「うん」

水島「私は、天皇の国だと思っているんですね」

執行「はい」

水島「天皇の国で、今の生きている国民ごときが、国民主権とは何事だと」

浅野「ええ。その通りです」

執行「ええ」

水島「冗談じゃねえよと。天皇陛下の国のものを、自分が所有権を持っているからって、勝手に外国人に売るなんて、とんでもないと。こういう感覚でやらないと、つまり自分が所有権を持っているっていう近代的なね、まあ、GHQが決めた農地解放もそうですけど…」

執行「元々公地公民だったんですから」

水島「そうです。だから、これは、やっぱり、この天皇の国だという意識があって、その上でお借りして所有権を持って自由に使わせて戴いているという感覚でないと、山も森も土地もみんな、金を貰ったら平気で外国人に売っちゃう。もう一回、この感覚を改めないと、一体、今、生きている、この浮薄な、それこそ三島さんがこういう風におっしゃっているような、こういう国民がやるっていうこと自体、凄い問題だっていうね。

だから、私は、もう国民主権をやめた方がいいと。世界中を見ても、そんなに多くないですよ、宮崎さん、これねえ。というようなことがあるんでね、この問題も三島由紀夫の天皇論の中で『文化防衛論』もそうだけど、結局、時間ですよ。この土地は、神武天皇がおつくりになってから無数の先祖と皇室がきちんと統治して来た国なので、その中で、我々は住まわせて戴いていると。

この感覚が無いと、みんな、自分の土地だと思ってね、だから、このことを、もう一回、取り戻さないと、なんでもかんでも、ぼいぼい、ぼいぼい、土地も何も売っちゃう。言葉も売る。天皇の国の言葉というものを大事にしようとかね、こういうことも、もう一回、ちゃんとやらないと、昔は未だ宗教で言うと、あの谷口正治さんのね、宗教というのは、天皇の国って、はっきり言っていた」

一同「はい」

執行「三島さんも日本とは天皇だと、はっきり言っていますよね」

水島「そうなんです。だから…」

執行「はい。理論でも言っているし、本にも書いてあるしね」

水島「だから、これをねえ、もうちょっと…」

執行「日本イコール天皇だということを、はっきり言っているんですよ」

水島「そうなんですよ」

執行「うん」

水島「だから、そのね…」

富岡「言葉なんです」

執行「はい」

水島「だから、まるで天皇陛下も国民が選んでいいみたいなね」

執行「はい」

水島「何を言っているんだっていうね」

執行「今、人気投票になっちゃって」

水島「そうなんです。だからイギリス型とかね、国民に阿るようなことをする必要はない。責任をもたなきゃいけないのは先祖とね、126人…」

富岡「そういう意味じゃ、日本国憲法の天皇条項は極めて危険ですよ」

水島「危険です」

富岡「それで、一応、あのう…」

水島「特に国民主権っていうのは一番、危険でねえ、何でも自分達でやれると思っているというね、まあ…」

富岡「その地位は主権の存する国民の総意によるっていうね。ただ一方で皇室典範では、天皇は世襲であるってあるから、この矛盾をもう一回、しっかりと改憲しないと駄目だと思いますね」

水島「そうなんです」

富岡「やらないと駄目だと思いますね。九条以上に、まあ、九条は、もう解釈改憲を徹底してやっちゃったからあれだけ（笑）、九条以上に危険なのは天皇条項です」

水島「そうです」

澤村「だから、その国民主権というのはね、まあ、これは西部さんが言っていたことですが、今の現在を生きている国民の主権というんじゃないくて、歴史的な国民も含めた国民主権っていうように読み替えればいいと思うんです、その問題はですよ」

富岡「だから、そういう風に少し書き加えてもいい」

澤村「うん、まあ…」

執行「今、生きている人だけが国民じゃないですからね」

澤村「その通りです。そういう解釈にすればいいと」

執行「我々は先祖の中に暮らしているんで。主権ってね」

水島「墓の下の民主主義っていうね」

三浦「元々主権っていう概念は非常に危険な概念で…」

水島「先祖も意見を持っているっていうね」

執行「主権ってね。主権概念自体が…」

三浦「主権自体が危険な概念です」

執行「だって、あれがフランス革命からだもんねえ」

富岡「そうなんです」

執行「うん」

三浦「主権っていうのは、もう無制限の権力なので」

富岡「はい」

三浦「これは法的には非常に危険なものだっていう…」

執行「要は、神っていうことでしょうね。神」

水島「そこのところをねえ、やっぱり本当は議論しなきゃいけない」

執行「はい。ほんとね」

水島「我々の土地とか、そういうものの自体は、お借りしているっていうね。まあ、所有権を持つとしてもね。そこのところの意識が無いと、外国人にどんどん土地を売っているっていう感覚が、国会議員もそうですよ。天皇の国という意識が無いから、或いは無数の先祖達が育てて来た土地というね、国だという、この感覚が無いとお金さえ貰えば売っちゃうというね、今、それがああるんじゃないかっていう気がしますね。まあ、その辺は何て言われるか分からないけど、最近、特に、これは言おうと思ってね、外国人にどんどん土地を売っていますからね」

執行「でも売っているのが、また日本人だっていうのが情けないよね」

水島「そうなんです。だから彼らは自分のものだと思っているから売ってもいいだろう、俺が買ったんだから、2倍で買ってくれるって言うんなら売るよってなっちゃうんですよね」

執行「うん」

水島「それは先祖や陛下に申し訳ないという意識が無いですね」

執行「自分の先祖に対しても無いでしょうね、申し訳ないっていうかね」

水島「無いですね。だから、その…」

澤村「それは、やっぱりねえ、もうひとつは、その保守の理論的な、何て言うのかなあ、あのう、ちゃんと構築した上で何かを言うっていうのが無いと思う。だから参政党とか、全然、評価しませんけど、今、必要なのはシンクタンクをちゃんと創ってね、伝統とは何かっていうのを議論して、そこに関連するんですけど『文化防衛論』の中で、三島由紀夫は凄くいいことを言っているんですよ。

つまり伝統っていうのは、主体に再帰する、再び帰って来るものだと。それによって連続性を確認する。それが伝統」

水島「そうですよ」

澤村「結局、それは歴史から繋がっているんですから、新しい創造ですね。その連続性と再帰性を回帰して、それによって新しく創造していく、今を変えて行くっていう、ちゃんと、そういう論理の筋道っていうか、発想の筋道が無くて、ひとつひとつの現象に感覚的な反発をするっていうのは良くないと思いますね」

水島「そうですね」

一同「うん」

澤村「ちゃんと、それをつくるシンクタンクみたいなのを、構築した方がいいと思うんですね」

水島「それもね、そのシンクタンクの人が、ちゃんと文化の連続性っていうね、つまり、文明みたいに発達して発展していくんじゃないんだと。連続して輝いたり輝かなかったりね、そういう回帰する連続性、時間が中心なんだっていうね」

澤村「そう。だから過去が大事な訳ですよ」

水島「そうそう、そう」

澤村「それで未来へ繋がっていくっていう発想ですよ」

水島「そうなんです」

澤村「今しかない訳ですからね、今の人達はね、そうですね」

水島「これがトーマス・マンの文明と文化の違い」

執行「はい」

水島「文明と文化の戦いっていうね」

富岡「だから日本の時間、歴史感覚というのは、時間感覚はシュペングラーが言っているような文明の攻防じゃないですよ」

水島「うん」

富岡「だから正に文化防衛論で言っているように、もう一度、再帰するっていう、伊勢神宮の式年遷宮とか天皇の大嘗祭とか、そういうところですよ」

水島「その通りです」

富岡「だから常にリフォーム トゥー、コンサーブされていくっていうね」

執行「その通り」

富岡「この連続性と歴史性、時間性みたいな、それが伝統になると。尚且つ、そこに天皇の超越性が入って来ると。今、それが大嘗祭であるという、だから、そういう時間と空間を全部、きちっとつくられたね、そういう体系が日本文化の素晴らしい体系がある訳で…」

水島「そうなんだよねえ」

富岡「だから、それは正に明確に…、政治家は、そういうのを勉強しないのかね」

澤村「そう」

浅野「しないですよ。票にならないですもん」

富岡「え？」

浅野「票にならない」

富岡「票ってそういうものなんですか（笑）」

水島「それとね、まあ、これ、今、皇族の皆様は…」

富岡「いや、でも、それはコモンセンスというか常識としてね」

浅野「ええ、ええ」

富岡「自分の中にあれば、おのずから政治家の立ち振る舞いとか、言葉の隅々に一貫性み
たいなのが出て来るんじゃないですか」

浅野「うん」

澤村「状況、状況で適当な事を言うようになって来ると思いますよ。特にネットが発達し
ていますから、これは危険ですね」

富岡「だから靖國神社に行って貰うのはいいけど、伊勢神宮にも行って下さいぐらいの
ね」

執行「うんうん、そうです」

富岡「感覚はちゃんと持っていればいいと思うんですけどね」

執行「今言った式年遷宮だけど、ああいうことをやっているのは日本だけだと思うんです
よ。日本というのはね、あのアンドレ・マルロー（André Malraux）が言っているけど、歴
史が目の前に本当に存在している訳、20年毎に。ギリシャなんていうのは、偉大な文化
だって、勿論、偉大ですけど、偉大な文化だけど、アンドレ・マルローが言っているの
は、全部、遺跡な訳ですよ」

一同「はい、そうです」

執行「偉大だったけど遺跡」

富岡「遺跡です」

執行「でも日本の文化は…」

富岡「いや、世界遺産ですよ」

執行「目の前で触ることが出来るということを言っていたけど」

富岡「そうです」

水島「そうですよ」

執行「これ、大変なことだと思う。これは、三島先生が一番、言っていたんだと思う」

富岡「しかも、あのう…」

執行「肌で触れる」

富岡「まあ、明治以降、式年遷宮で次に移す所は、一つの空間を開けていますよね」

執行「はいはい」

富岡「御敷地って」

執行「変わりばんこね」

富岡「古殿地、御敷地になるんですけど」

執行「はい」

富岡「まあ、あれは江戸時代迄、ちょっと違っていたものだったんですけど、でも空間の
中に時間が堆積している訳ですよ」

執行「うんうん」

富岡「日本人は行けば、それを感じる訳です」

執行「そうですね」

澤村「大事なのは、伊勢神宮のそういう重要なイベントと、庶民の日常性の関わり方だと思うんですね。これも『文化防衛論』ですけど、津田宗吉の言葉で、文化生活の仕方だって、凄くシンプルな提言が為されているんですよ。それから日常の生活の精神だっというように言っています。そこがある種の普遍性に繋がるんだけど、それと今、言ったのは歴史的な構造物とか伝統的なもの、それだけ見ているんじゃないくて、そこと一般の人の普通の日常性で行ったり来たりするような、そこをつくっていかなきゃいけない。そこは、やはり思想的にちゃんと交通整理する時代だと思いますね」

富岡「あと、よく誤解されるんだけど、三島さんは市谷で天皇陛下万歳を叫ぶって言ったので、何となく戦前の天皇制を肯定しているか如きの誤解があるんですけど、そんなことは全くなくて」

執行「はい」

富岡「『文化防衛論』読めば、やっぱり大正14年の治安維持法によって、その国体を変革し、又は私有財産の制度を否認することを目的として結社を組織し、または情報を知りて、これに加入した者を取り締まると。つまりこれは国体、天皇と資本主義、ブルジョワ勢力を並列的に規定する」

執行「うんうん、うん」

富岡「このことは決定的に駄目な事だと。国体を損じたんだと。ですから明治以降の天皇制に於いては、自由な創造的主体を縦横する文化概念としての天皇は日本の近代史に於いて一度も、その姿を現すことは無かったと明言していますよね」

執行「そうですね、はいはい」

澤村「そこを思想的にちゃんと整理しない上で…」

富岡「だから、そうなんです」

澤村「個々の言論があるのが危ないと思います」

水島「いや、そこです」

富岡「戦後の天皇制だけが駄目、GHQで駄目で戦前の天皇に戻ればいいって、これも違うんですよ」

澤村「それは三島さん、違います」

富岡「違うんです」

澤村「旧軍のことも別に礼賛していないしね」

富岡「していないです。だから明治以降の近代天皇制そのものの持っている問題点」

澤村「うん」

富岡「間違っているのをね、はっきり言っているんですよ」

執行「はい。それもありますよね」

水島「うん、だから、それはねえ、この間、やったけど、よく明治維新の…」

富岡「はい」

水島「やはり明治維新の中で、皇室の祭祀の中に仏教と儒教、まあ、朱子学ですけど、こういう要素、全部、消してしまった」

執行「はい」

水島「結局、皇室、皇統そのものだけのイデオロギーになっていった」

一同「そうですね」

水島「これが明治維新の変質で、やっぱり西洋の近代化っていうのを受け入れるっていうのと、その矛盾をやったので、今、富岡さんが言ってくれた、そのところです。だから我々が、もっと大らかであるっていうのとねえ」

富岡「そうです」

水島「もう一つ、これは、どうですか。敢えて言いますと、これ、誰だったか、評論家が言っていたんですが、三島由紀夫の文学には笑いが無い」

執行「ああ、誰だったっけ」

水島「誰だったか、何とかみつおだったかな」

浅野「中村光夫です」

水島「中村光夫さんだったか。平野謙じゃないと思うんだけどね。もう一つ、私は江戸というのが凄く好きなんだけど、例えば一番、解り易いと思うのは、亡くなったけど杉浦日向子さんっていう人がね、江戸の千年語りみたいなことをやっていたんだけど、この中で、最後のエッセイに書いているのは、江戸を一言で、優しく愚かで美しい、これが江戸の文化でね、庶民文化、優しく愚かで美しい。生き方が、もう何て言うのかな、刹那的だけどね。

ただ愚かで美しいと。馬鹿みたいな若旦那とか与太郎とか、落語に出てくるような、江戸には、こういうものの幅があった。だから、そのところで今、私が三島由紀夫という人は、江戸の戯作とか色んなものがあるじゃないですか、浮世絵とか或いは、もっと言えば枕絵とか、エロティズムというのは、ちゃんと認めた人ですけども、こういったもののの中の、もう一つは笑いというのが、あまり文学の中にはない。ご自身は大変、高笑いする方だと聞いていますけど」

執行「ただ僕はねえ、あの三島文学の中には、そのいい意味で、笑いですかねえ、日本的な笑い。僕は感じますね」

水島「ほお」

執行「どの部分を笑いが無いっていうのか分からないけど、例えば、僕の好きな文学論でやるんだけど『美しい星』とかね」

水島「ああ、はい」

執行「『美しい星』というのは非常に深刻な問題を扱っているんですが、深刻な問題を物凄く日本的な、今のこの江戸のね、江戸的な笑いの中に吸収しようとする働きを、僕は、何て言ったかな、宇宙人と対話する大学教授が、ああいう中に見ますよ」

水島「なるほど」

執行「あとはねえ、代表作では『潮騒』ね」

水島「うん」

執行「『潮騒』の中に、僕は神話的な笑いです。日本神話の中の笑いと、ギリシャ神話の中の笑い」

水島「どっちかと言うと…」

執行「うん、そういうものと」

水島「アルカイクスマイル系の」

執行「はいはい。そういうものを感じますよ」

水島「なるほど」

執行「だから、僕は割と感じるので、何処の部分を言われているのか、ちょっと判らないですけどね」

浅野「これは野坂昭如が三島文学には自然が無いって、潮の香りがなくて人工的な構築しか感じないって言ったのと一緒に、とにかく権威に対して悪口を言いたいただけみたいなもんだと思うんですよ」

水島「(笑)」

執行「僕は、非常に、あのねえ…」

浅野「例えば『鰯売戀曳網』（いわしうりこいのひきあみ）という歌舞伎作品があるけど、これはね、歌舞伎座が笑いの渦に包まれるんですよ」

執行「うん」

浅野「そのぐらいにユーモアに溢れた作品ですね」

執行「三島の『近代能楽集』というのは、非常にユーモアに溢れていますよ」

浅野「はい」

水島「私も大好きなんだけどね、それっていうのは、実は自分の映画の中で使ったような感じでね」

執行「ああ～」

水島「ちょっと能のあれを使ったりしてね」

執行「はいはい『近代能楽集』はい。うん」

水島「どっちかと言うとね、私は三島さんの作品は読み終わったあとねえ、まあ、色々な話があるけど、『美しい星』もねえ、何か、ちょっと悲しくなるっていうね」

執行「勿論、悲しくはなる。深刻だから。深刻で悲しいんだけど、何かその中に、こう、うっちゃうような何か、こう…」

水島「うん。戦後のね、あれを引き受けちゃった人がね」

一同「うん」

水島「本当にああいうものを背負っているからね」

執行「はい」

水島「そういうものをね、何を読んでもねえ、何か悲劇性を持っているっていうねえ」

執行「そうですね」

水島「あれは、やっぱり、別に笑いがあるからとか無いからとか、いい悪いじゃなくて、何か、そういう意味でのひたむきさとかね」

一同「うん」

水島「私から言うと追い詰められ方。それで孤独を、孤立を守らなきゃいけない。それでも一人で頑張るみたいだね。だって戦後に、第三の新人とか色々出て来たけども、真面目な物語を創ろうとかいう人が居なかったじゃないですか。あまりね。色々女を好きになった、こいつがこうなった、こいつをこうやった、ああやった、こうで、とかって沢山、あるけどね、やっぱり、そういう意味での物語というかねえ、ある種の成功したのも…」

富岡「いや、さっき三浦さんが言った、そういう意味じゃあ、戦後文学というのはそうですよ。第三の新人まで」

水島「そうそう。いや、私も別に嫌いじゃないんだよね。第三の新人も好きだけど」

澤村「そうですね。あれはあれで面白いですね。うん」

水島「ただ、そういうこじんまりした日常の中から何かを見出すみたいな、それはいい作品も沢山、あるけれども、三島由紀夫に、最後に私が一番やって貰いたかったのは、時間があればですけど、彼に大東亜戦争の叙事詩を書いて貰いたかったなあというね。いや、『豊饒の海』だって、大きな叙事詩をちゃんと書いているんですよ。ただ、何かそういう感じがね、今、それをやれるのは本当に三島由紀夫しか居なかったんじゃないかっていうかね、大東亜戦争叙事詩っていうかねえ、戦い、滅びて行った人達を、彼だったら書けたかも分かんないっていうね。残念ですけどね」

富岡「まあ、『英霊の聲』だったんでしょうね」

執行「そこから始まったんですねえ。う～ん」

水島「『英霊の聲』を書いた人でしょ」

富岡「うん」

水島「だから、あの思いがある人だから、それをちゃんと開戦から何まで、滅びゆく日本民族でもいいから、現代の平家物語みたいなね」

澤村「滅びの文学っていうのが日本の伝統ですからね、昔からありましたから」

富岡「恐らく『豊饒の海』のあとに藤原定家を書きたいと言っていたのは…」

執行「言っていましたね」

富岡「そういうものを、まあ、定家に託して」

水島「ああ」

富岡「日本の滅びみたいなものを書こうとしていたんじゃないかと思いますね」

水島「うん」

執行「でも義挙自体が、さっき言いましたけど、論理的にね、組み立てられているっていうことは義挙、最終文学と、僕は捉えています、そう捉えた場合、もう滅びの文学ですよ」

水島「うん」

執行「僕は、その義挙を最終文学と捉えた場合、『豊饒の海』は、その序論と言うのかな、序論のように聞こえますよね」

水島「なるほどね」

執行「うん」

富岡「だから、これね、三島さんって勿論、普通、小説って一番、最後に日付なんて入れないですよ」

執行「そうそう入れないんですよ。それが入っているんだよ」

富岡「でも、これだけが『豊饒の海、完』ってなって、昭和45年11月25日って日付が入っているんですよ。だから、これは、最後の『庭は夏の日盛りを浴びて、しんとしている。……』というのがあって」

執行「そうそう、そうそう。うん」

富岡「このあとに、ちゃんと入っているんですよ。これが義挙ですね」

執行「はい」

富岡「だから義挙と作品が一体化しているんです」

執行「僕は、それを序論だと思っている」

澤村「だから、こういうところが、野坂昭如に人工的だって言われたのかもしれない」

富岡「ああ、そうかもしれない（笑）」

澤村「自然な感じじゃなくて、非常に作られたね」

執行「あの人はちょっと歪んでいましたからね。何か雰囲気」

澤村「原稿をとったことがあるんですけど…」

浅野「何を言ってもいいんですけど（笑）」

富岡「凄く尊敬していましたね。恐らくね、死んだ時、一番、真摯な反応をした一人が、野坂さんでしたね」

澤村「野坂さんの三島論は秀逸ですよ」

富岡「三島の死に圧倒され、本当に、ただ喪に服するのみっていう一言を書いていたからね」

執行「でも、そういう人は結構、居ましたね。小林秀雄もそれに近い事を言っていたね」

富岡「近い」

澤村「そうですね」

執行「ただ悲しいだけだっていう、何かね」

水島「福田恒存も沈黙しちゃったのは立派だと思いましたね」

富岡「福田恒存は微妙ですよ」

澤村「微妙、微妙」

富岡「だから江藤淳は、もっとヤバいけど。福田さんは微妙だった。それは西尾幹二さんのところへ、この間、行った時に、福田さんも相当、狼狽えたと」

水島「う～ん」

富岡「狼狽えたって」

水島「いやあ、やっぱりショックを受けたっていうのは偉いと思いますよ」

澤村「ずっと一緒でしたからね。鉢の木会とかね」

富岡「それは相当、狼狽えたって」

水島「ああいう形でねえ、『ごっこ』だっていう形の、ああいう批判の仕方はちょっと卑怯だっていう気がしますよ」

富岡「まあ、そうです。江藤さんは、もう駄目ですよ」

水島「うん」

富岡「もう、あの時点で」

水島「いや、簡単に、沈黙してね。言えなくなっちゃうっていうのは…」

富岡「だって、あの時、この中で中村光夫との対談もやってますし、そのあと小林秀雄との対談で、三島さんは早い老いが来たとかね、或いは病気だと言って、小林秀雄が江藤淳に怒るじゃないですか」

水島「小林秀雄に怒られているってことか」

富岡「怒られているんです。そんなことないと」

水島「あの大東亜戦争も病気なのかって言ってね（失笑）」

富岡「そう。吉田松陰も病気かって」

水島「はい。吉田松陰も病気かって言ってね（失笑）」

執行「吉田松陰が病気だという解釈は、みんな、今の歴史解釈でやっていますよ。東大の教授も」

富岡「ああ、なるほどね」

水島「ああ…」

執行「吉田松陰は病気で精神障害だったと、はっきり言っている人が居ますからね。で、テロリストであると」

水島「それで三島もみんな、そうなっちゃうんだよね」

執行「だから、それを言ったら日本の歴史上でヤマトタケルノミコトまで全部、テロリストですよ、みんな（失笑）」

宮崎「テロリストがね、それね…」

執行「そういう批判的な意味で今、言っていますよ」

富岡「そうそう、そう」

執行「今、何かそういう見方をしているっていうことがね」

水島「やっぱり古事記の文章で、さっき教えて貰いましたが、やっぱり、私は、スサノオとかね、ああいうのって、乱暴者でね、もう田んぼをひっくり返すとか何だかとかね、あれは日本の自然そのものですよ」

執行「そうそう、そうそう」

水島「嵐が来るとか何かやって。それと、もう一つは、その中に情緒と言うか、よく泣いたりね、喚いたり、ああいうものを、ちゃんと入れる日本の文化の懐の深さと言うかね。こういう風に考えると、だから、あれを見た時、スサノオって人格神と思ったら、とんでもなくなっちゃう訳ですよ」

宮崎「はい」

水島「だけど、そうじゃなくて、あれは日本の自然とかね、世界っていうように考えれば
凄く納得がいくっていうねえ」

執行「はい」

水島「そういうものが我々の祖先にあるっていうねえ」

富岡「だから、そこで…」

澤村「神話の文化への影響ですね」

富岡「そういう神話の取り戻し、だから執行さんが、この中でね、三島が当時、執行青年
に語った、もう一度、天孫降臨をしなければならない」

執行「そうですよ。そういう言葉を、僕に言ってくれたんです。『天孫降臨』ですよ」

水島「あれ、凄いね、これね」

執行「はい」

水島「ちょっとビックリしたよね」

富岡「そうなんです」

執行「『天孫降臨』という意味は、やっぱり高天原の神々の気持ちと、地上に住んでいる人
間の心が一体となることを、三島先生は『天孫降臨』という言葉で語ってくれたっていう
ことですね」

富岡「だから逆に言えば、この古事記論の中でね」

執行「はいはい。はい」

富岡「ここに神人分離の関係の悲劇があると」

執行「ああ、分離ね、はい」

富岡「そのことと『天孫降臨』がもう一度、為さなければならないっていうのは…」

執行「合体していますからね」

富岡「一致しているんですよ」

執行「はい。そうですね」

水島「うん、いや…」

富岡「ただ『天孫降臨』とか…」

執行「だから僕はあれですよ、これは僕の意見ですけど、あの義拳は『新しい天孫降臨』。
新しい我々に目に見える神話を与える為に、三島先生がみんなの前で腹を切ったと思って
いますから。我々は、もうね、神を失って久しいですから、もう古事記とか色んなもの
を、はっきり言って、信じる気持ちがもう無いですよ。言われても。だから僕は、三島先
生は、みんなの前に、もう一回、神話ですよ。神話となるべき、だから無謀と言えば無謀
ですよ。神話って無謀な人間達で、無謀な魂ですから。それを示したんだと思っていま
すね。

僕は、そういう文学論で、そういう言葉も聞いていたので、それは、こういう本にもね、
よく書いて、僕は三島先生の遺言のつもりで書いている」

富岡「その三島さんが執行青年に言った『天孫降臨が行われなければならない』」

執行「うん。これからね、もう一度、しなければならない。うん」

富岡「そういうね、その言葉を、今の日本の文学者が理解していないということです」

執行「まあ、そうでしょう」

富岡「まあ、文壇でもね」

執行「はい」

富岡「論壇でも。理解していないっていうことです」

執行「そうですね」

水島「だから、その『天孫降臨』というのは、これから何か革命とか何か起こるとかいうことじゃなくて、やっぱり日本を取り戻すっていうね」

富岡「そういうことです」

水島「さっき、ちょっとおっしゃっていた文化のね」

執行「日本国が出来た時の心ですよ」

澤村「アイデンティティのね」

水島「それが、やっぱり今言った…」

富岡「だから江戸時代には、本居宣長が、そういうことをやろうとね、古事記伝で書くことでやる。三島さんが自分の文学と…」

執行「はい」

富岡「あの最後の…」

執行「最後の」

富岡「義挙で」

執行「あれでね」

富岡「やろうとした。それが一致することで、神話をもう一度、創ろうとしたと」

執行「うん」

水島「だから、やっぱり宣長的に見ると、まねびっていうかね」

富岡「はい」

水島「それを、もう一回、繰り返す事と、それから本当に再現させることっていうね、新しいものを創るとかそういうことじゃないね」

富岡「そうですね」

水島「その中に、さっき言った創造とかも入ってくるような…」

富岡「だから、この最後の未完の遺作も、最後の自決と結びついていますよね」

執行「はい。そっちに全く向かっていますよ」

富岡「読むとね、全部、繋がっていますよね」

執行「そうです」

富岡「『文化防衛論』もそうですね」

水島「だから、その『文化防衛論』の中で言うと、改めて、ここで文化というものは時間性だっていうね。物質的な空間の発展や拡大や充実じゃないというね、これを、きちっと『文化防衛論』の中で言って、それが天皇だっていうね」

一同「うん」

水島「だから天皇が繰り返される、回帰する。常によきもの、よきものへと回帰していくというね、トーマス・マンは、実はフランスとドイツのプロイセンの第一次世界大戦の時、文明と文化の戦いって言ったんですよ。英仏合理主義対ドイツ文化の戦いだと。やつらの文明と、こっち、まあ、そのあと大分、変わって来ているんですけどね。まあ、そういう意味でも、非常に三島由紀夫という存在は今でも、これからも、我々に、ずっと問いかけ続けていくと思います」

富岡「ドイツが第一次大戦に負けて、それから第二次大戦のナチスで廃墟になったあとにフリードリヒ・マイネッケ（Friedrich Meinecke）という歴史家が1946年に八十何歳で『ドイツの悲劇』という名著を翌年、書くんですよ」

水島「はい」

富岡「最後に、この荒廃したドイツが今後、どうなるかっていう時に、ドイツ人の民族の魂の中にある打ち壊し難い本質に戻るんだと」

水島「おお～」

富岡「打ち壊し難い。そこだけはラテン語になっていたんですよ」

一同「う〜ん」

富岡「ドイツ語じゃなくて。それは何て言うかな、もう消し難い刻印っていう」

水島「ああ。じゃあ、解り易いですね」

富岡「これはサクラメント（Sacrament）ですね。洗礼とかのサクラメントですよ。だから、この民族の中には、そのサクラメントがあるはずだと」

水島「うん」

富岡「我がドイツ民族の打ち壊し難い本質に立ち戻るべきだと言って、具体的にはゲーテとかシラーの文学を出していくんですけど、だから日本人のね、日本民族の打ち壊し難い本質。魂の本質は何かということ、三島さんもね」

水島「本質っていうね」

富岡「うん。そういうことです。それは天皇であり、時間。時間と言っています」

執行「でも、そんなことも、三島さんは、はっきり言っていますよね」

富岡「言っています」

執行「天皇と」

富岡「天皇と言っていました」

執行「日本は天皇であると」

富岡「言っていますよね」

執行「うん。全学連との対話でも言っていますよね」

富岡「言っています」

執行「全学連と会話している時も、フィルムに残っていますけど、天皇さえ認めたら、天皇と言え、君達と僕は一緒なんだっていう」

富岡「そう」

澤村「そう、手を繋げられる事にね」

執行「そうそう、そうそう」

富岡「言っていますよね」

水島「でも、私は本当に痛ましさを感じますよ。あんな連中とね、悪いけど、やっぱり『ごっこ』だっというようなね、私は自分が同じ世代だから、あのゲバ棒を持ったり火炎瓶程度を投げたりしてね、日本の警察は優しいから銃で撃ち殺さないですね。せいぜい、ガスでおとなしくさせるぐらいでね」

執行「ただ三島由紀夫と議論するのに、何か全学連の誰か知らないけど、赤ちゃんか何か、背負ってやっている人が居ましたね（笑）」

澤村「ああ、あれは角田さん」

富岡「角田」

浅田「角田ですね」

執行「あれ、ふざけて。あんな感覚ですから」

水島「うん。だから、本当に敵を過大評価しちゃったなあというね。結構、ろくでもない奴らなんですよ」

富岡「彼らは時間を否定して空間主義ですよ」

水島「うん、そう」

富岡「徹底して空間なんだって言っている」

水島「でも、さっき言った安田講堂から飛び降りろっていうね、そうしたら、日本の戦後民主主義なんていうのはちゃっちゃいもんだから、びびっちゃってね、機動隊が引き揚げるぞと言ったら、ほんと、そう思いましたね」

執行「でも、あの学生運動の学生が、みんな、本当に飛び降りたら歴史は変わったでしょうね」

水島「そうですね」

執行「うん、間違いなく」

水島「本当に危ない、それこそ三島…」

宮崎「それこそ、マサダですよ」

富岡「マサダ」

水島「だから、それこそ本当に盾の会が出なきゃいけないね」

一同「はい」

水島「そういう状態になったかも分からないですよ。だからそれをやるだけの力量も根性も無かったってことだと思いますけど」

富岡「本当は、あの10.21でね」

水島「うん」

富岡「前の年の」

澤村「うんうん」

富岡「国際反戦デーで全共闘が暴れてね」

水島「新宿のあれですか」

富岡「新宿騒乱。あの時に盾の会が出ていったという予定でしたね」

執行「あそこでやる予定だったんですからね」

水島「そうそう、そう」

富岡「そう、『豊饒の海』は途中でね」

執行「そうですね」

富岡「自分の死をね、ちょっと高倉健的なところがあるんですけど（笑）」

執行「ただ『豊饒の海』というのはねえ、僕が感覚で思っているのは、何処で切れてもいい訳ですよ」

富岡「う～ん、なるほど」

執行「だから別に、僕の感覚では、僕が出会った時は昭和41年ですが、一巻で終える予定でしたから」

富岡「ああ」

執行「そういう感覚でした」

水島「ああ、なるほどね」

執行「僕と話して、僕が『葉隠れ』が物凄く好きな青年だったので」

一同「ああ」

執行「『葉隠れ』のことを、うんと喋っているところで、あの第二巻を書く感覚が出て来たみたいですよ」

水島「ああ、なるほどねえ」

執行「はい」

富岡「僕は執行さんに申し上げた、ここにね、1年目に天人五衰ノートが収録されてね」

執行「ああ、ノートね、はい。安永少年」

富岡「その『本多はすでに老境』、そこにね『ついに78歳で、死せんとする時、18歳の少年が現れ、嫣然、天使の如く永遠の青春に輝きけり』これが出て来るんですよ」

執行「はい」

富岡「『この少年のしるしを見て本多はいたくよろこび、自己の解脱の契機を掴む。思えば、この少年、第一巻よりの少年は阿頼耶識の権化、阿頼耶識そのもの、本多の種子なる

阿頼耶識なり。本多死なんとし、解脱に入る時、光明の空へ船出せんとする少年の姿、窓越しに見ゆ』。僕は、これは執行さんだって解ったんですよ」

執行「いや、ちょっと待って（苦笑）」

富岡「いやいや、解ったんですよ。ずうっと謎だったんです」

執行「その時、僕は丁度１８歳ですから」

富岡「この少年は誰だと思っていたんです」

執行「これは１８歳ですよ。その時」

水島「うん」

富岡「だから、これで解ったんです。ただ実際の名前は、安永になっているんです」

執行「あの小説では、そうなっていますね」

富岡「うん。ああ、それで」

水島「阿羅耶識と考えると、さっきのベニスと美少年」

執行「はい。ああ、そうそうベニスのねえ」

富岡「それで多分、三島さんはね…」

水島「阿羅耶識が入ると第六感みたいなものですから」

富岡「決意をされたと思うんです」

水島「はい」

富岡「だから、この『豊饒の海』は、執行少年と会って続巻が書かれた」

執行「はい」

富岡「一方で翌年ですよ、森田必勝と出会って」

執行「そうです。僕と会った翌年に、盾の会を結成して森田さんと」

富岡「森田さんと」

執行「出会ったんですね」

水島「なるほどねえ」

富岡「だから、この二人の青年が…」

水島「それになっているんだ」

富岡「『文学と行動』というのをね、いたってということです」

執行「僕は４年間、たまに会って文学論させて貰った時に、三島先生は盾の会の行動については一切、喋りませんでしたから。僕と会った時は文学論だけ。だから文学論だけの青年と、政治行動の青年と二人居た、もう僕は死んでから判っただけで、それまでは全然、分からない」

澤村「やはり、それはモデル意識で、二つのタイプを自分の中で比較して見てみたかったんでしょうね」

富岡「そうでしょうね」

執行「うん」

富岡「明確なモデルをつくっていたということでしょ」

執行「そう。三島先生の中に、そういうのがあらわれたんだと思う」

澤村「それは作家魂ですよ」

水島「それは三島文学の本質的なものを凄く表しているような感じがしますね」

執行「うん」

富岡「だから三島の小説とは何か、これも遺作ですけど、自分は作品内の現実と作品外の現実。この二つが常に拮抗対立」

水島「うん」

富岡「その中から、全て自分の人生があるって言っているんで、つまり二元論ですよ」

執行「はい。先生の二元論ですね」

富岡「日本の作家で、こういう二元論をやっている作家は居ない」

水島「そうなんですよ」

富岡「そうしたらトーマス・マンは、その二元論のモデルだったと。だから『太陽と轍』ではね、二元論を書いていますけれど、それを恐らく実践したんだと思いますね」

執行「はい」

富岡「昭和41年から」

水島「そのトーマス・マンの二元論で言うと、トーニオ・クレーガー（Tonio Kröger）という小説家が二元論でね、芸術家と金髪の俗物達というね、でも、その人達は常に芸術家が俗物達に憧れているっていうね、この引き裂かれた状態で、それで、その中で言うと、月って言っているんですね。私は、これは天皇がそうだという意識を持っているんだけど、実は天皇、月は太陽と違って人を温めることも出来ないし、冷めることも出来ない。作物も育てられない。でも夜の闇をちゃんと照らす。独りぼっちを救ってくれるっていうね。和泉式部の『暗きより、暗き道にぞ入りぬべき、遥かに照らせ、山の端の月』という、あれと同じように、だから天皇の存在というのは本当に物をくれたり、金をくれたり、食べ物を与えたり、パンをちぎってくれる訳じゃないけれども、でも必ず居てくれる、祈ってくれているっていうね、この我々日本の民族が持っているっていうね、これは、極めて特種なものを、やっぱり私達が持てるというね。

それと芸術家の苦しみっていうのは、だから愛することは出来ても愛されることはないということを引き受けなきゃいけない。だから三島由紀夫っていう人の悲しみというかね」

執行「う～ん、孤独でしょうね」

水島「うん、本当に」

執行「僕は真の孤独なんだなあ」と

水島「本当に芸術家の孤独っていうのは、やっぱり執行さんを愛したんですよ」

執行「それは、ちょっと判らないですが（失笑）」

水島「いや、愛したって変な意味じゃなくてね」

執行「（頷く）」

水島「そういう真っ当な…」

執行「丁度、そういう時期に会ったというのは、やっぱり運命ですよ。うん」

水島「いや、文学的に凄く真っ直ぐな人とね」

執行「だって僕は文学が死ぬ程、好きな青年でしたから」

水島「ね」

執行「だから、そこは非常に喜んで下さった訳ですよ。もう会った時には、日本の文学は終わったと、もう絶望でしたから。その時に文学が死ぬ程、好きな人間で、当時は16歳ですよ、僕は。だから16歳の青年に会ったから、それから三島先生は、さっき言った『奔馬』も書き、ああいう方に向ったように見えましたよね」

水島「それと、さっき言った森田さんっていうね」

執行「はい。次の年に森田さんと会った」

水島「凄く政治的になって言うか」

執行「はい」

水島「現実に生きる中で真っ直ぐなね」

執行「はい」

水島「これは宮崎さん、森田さんというのは、そういう人だったんでしょ」

宮崎「いや、それは話せば3時間位、かかるので」

一同「(笑)」

宮崎「今日はやめておきますけどね」

水島「うん」

宮崎「昭和44年ですよ、彼が盾の会の学生長になるのは」

水島「はい」

宮崎「これは多分、来年、完結しますけど、もっと詳しい物凄いディテールがあつてね、ですから、今のように簡単に森田のことを割り切っていかどうかって言ったら、ちょっと疑問です」

執行「うんうん、うんうん」

水島「まあ、私は前にちらっと言ったけど、飲み屋で一回だけ、お会いした」

執行「ああ、お会いした事があると」

水島「いや、みんなで飲んで、うちの仲間と毛沢東の話をしていて、いや、あの当時は、4億か5億だったんですけど、4億の民を纏めているんだから、毛沢東はそれなりの人物だろうって言ったら、後ろで『売国奴おっ！』と言って、後ろから頭を蹴ったか殴ったか、ばあ〜んってやられて、何だ！って言って、向こうのグループと取っ組み合いになったんですよ。

それで店の人が、すみません、外でやって下さいって言うから、みんな、表に出ろと言うから、お前ら赤軍かって言うから、ふざけんじゃねえよと言って、そうしたら早稲田大学教育学部国語国文学科の森田です、すみません。誤解しましたと言って、まあ、わかりやあいんだけどさあという話をして…」

執行「そういう突撃的なところは、やっぱり山口二矢さんとか、そういうところが似ていますよね。山口二矢さんも、僕は知っていたんだけど、もう変な話だけど、赤い色を見ただけで突撃していったね」

一同「(笑)」

執行「いや、赤いものは全部、木刀で叩き切るっていうねえ」

水島「ああ、そこまで行くと凄いねえ。だから、そういう意味でね」

執行「そういう激しいね」

水島「冷水浴びてね、北方領土で泳ごうとか、色んなことを、私も伝記的なもので、読んだことがあったけど…」

執行「いい顔していますよねえ」

水島「ええ。是非、これは、また、いつかね」

執行「いい顔している」

宮崎「広瀬中佐とそっくりなんだ」

執行「そうだねえ。ああ、そう。広瀬中佐とそっくり」

水島「へえ」

執行「広瀬中佐は、柔道の大家だった」

水島「ああ、そうですか」

執行「ありゃ、本当だ、言われてみればそっくりだ」

宮崎「そうですか(笑)」

水島「まあ、是非、これはね、また…」

執行「もうちょっと歳をとると広瀬中佐だよ、もうね」

宮崎「そうそう、そう」

水島「まあ、そういう意味で時間も段々来ましたので、纏めていきたいと思います。では、纏めは澤村さんからお願いします」

澤村「はい。抽象的な話になって誠に申し訳ないんですけど『文化防衛論』に戻って、最後に一言なんですが、先程、人間は根無し草に耐えられないっていうのが、その文章の中にあったと。非常にアクチュアルな点で三島さんの思想を考えてみると、要するに先程、連続性と再帰性、再び帰るで、再帰性っていう言葉ですよ。

それを喚起する伝統っていうのは、断絶による根無し草にならない生を補償する為のものであって、人々にとって生きる上で必要なものだっていうことがあります。多分、それは、やっぱり噴出して来ると思うんですね、色んな状況の中でね」

水島「うん、うん」

澤村「それは根無し草に耐えられない訳ですから」

水島「うん」

澤村「やっぱり、そこに三島さんの考えなり言って来たことが何処かで結びつき、そこに正にアクチャーの生き生きしたものを生み出す可能性っていうのがあると思うので、それは、ちょっと今後のことを色々見ていきたいなっていう風に思っていますね。そういった辺りでは期待しています」

水島「なるほどね。はい。有難うございます。じゃあ、三浦さん、お願いします」

三浦「はい。先程、中村光夫さんでしたかね、話が出まして、ここでは割と否定的に語られましたが、私は、それねえ、中村さんの言いたかったことも解るような気がするんですよ。やっぱり、それは江戸文学であれ、何であれ、そういう戯作者的なもの。もっと言えば今風の言い方、まあ、今、もう過ぎちゃったけどサブカル的なもの、ああいったものが三島文学には無いじゃないかっていう風に読み替えれば、それは一理あります。

ただ僕は、三島さんっていうのはやろうと思えば簡単に出来た人で、幾つかの命売りますとかでは、それっぽい事をやっていて、何が言いたいかって言うと、三島さんが敢えて、それをやらなかったのは、あの人が生涯、戦ったのは、まあ、それだけじゃないけど日本を取り戻すこともあったかもしれないけど、何よりもあの人が否定したのは、価値相対主義だと思うんですね」

水島「うん」

執行「そうですね」

三浦「正義っていうのは人の数だけあるんだとか、それぞれによって価値観なんていうのは、みんな、相対的なものだとか。それは一面の真理ですけど、それを、やっぱり、ある意味では戦後の日本って言うか、もう、ある意味で世界がそうになっていった中で、それだけは否定したんだと思います」

水島「なるほど」

三浦「それは、やっぱり戯作とか、或いはサブカルというのは、やはりメインカルチャーを、ちょっと外したり、笑ったりするところで整理するものですね。メインカルチャーが無くなってしまった中で、それをやったら、あとは自己解体しか残らなくなるんですよ。だから、三島さんは多分、そっちを辿らなかったんだらうと、僕は思いますね。はい」

執行「時代的にね」

三浦「はい」

水島「うん、そうだと思う」

三浦「だから、私は、やっぱり、あの方がやろうとしたことは、価値相対主義というのを否定する事。日本は天皇だって言いましたけど、逆に危なかったのは凄い危機感があって、天皇しか残っていないんじゃないかっていう意識で言っていたと思うんですね」

一同「うん」

三浦「日本は天皇が居るから大丈夫なんていうことは絶対に思っていなかったと思うんで

すよ。それが一番、大事なことで、時々日本の保守、僕も含めて、神道は環境に優しいとかですね、ああいう訳の解らないって言うか、もう、そんなことを言うと気の利いたことを言っていると感じるんだけど、そういう、つまらないことは絶対に言わなかったと。で、天皇は居るから日本は大丈夫だじゃなくて、これしか残って無いんですというのが、あの人の信念だったと思います」

水島「はい。では富岡さん」

富岡「はい。三島由紀夫十代書簡集っていうのがあってね」

執行「ああ、はい」

富岡「これは1999年。実は、この書簡は三島さんが16歳から18歳まで学習院の先輩であった東文彦さんに宛てた『花盛りの森』とか書いている頃のもんです。実は、この書簡は、僕がある方から全て戴いたんです。それで、それを色々探しまして、それで東家と出会いましてね、本当は、私がある方から戴いたので、全部、私のところにあってもいいんですが、色々な経緯があって東家に全部、お返ししました」

水島「おお～」

富岡「この書簡集は今、新潮文庫に出ているので是非、お読み戴きたいんですが、言いたいののは、要するに三島さんの思想の源流は、やっぱり十代にある」

執行「はい」

富岡「昭和16年から18年の間につくられたことがありありと、この書簡集から、私は当時、感じて、そのことを解説でも書きました。昭和18年8月24日、東さんという方は4歳ぐらい上で、ただ結核で会うことが殆ど出来なくて、間も無く亡くなるんですね。二十歳前後で亡くなるんですが、当時、三島少年、まあ、平岡公威ですね。『近頃の「近代の超克」と言い、東洋に帰れ、日本に帰れと言われる、その指導者なり立派な方々ですが、なまじっかの便乗者や尻馬に乗った連中の、そこかしこに醸し出している雰囲気汚さはちょっと想像のつかぬものがあります。我々は日本人である。我々の中に日本が住んでいないはずがない。この信頼によって、おのずからなる姿勢をお互いに大事にして参ろうではございませんか』って東先輩に書いているんですね。

だから当時の日本浪漫派とか近代の超克論とか、そういうものではなくて、それはあまりにも時局的であって、もっともっと自然な日本に立ち戻ろうという、より、まあ、根源的な日本に立ち戻ろうと」

水島「うん、立派ですね」

富岡「それは、おのずからなる『私達の中に、おのずからなる姿勢をお互いに大事にして参ろうではございませんか』って、東さんに言っているんですね。やはり、これは、三島さんが死ぬ1週間前に図書新聞のインタビューで、結局、自分は、パンドラの箱を開けたと。それは十代のパンドラの箱を開けたんだと言っているんですね。だから十代の三島由紀夫の魂に自分は帰るんだと。それは、やっぱり、この書簡集には、よく出ているなあと思って、文庫で今、読めますので是非、お読み戴ければと」

執行「何処で読めるんですか」

富岡「はい、新潮文庫で。これも新潮社です。これは単行本であります」

水島「いやあ、でも大変なことを十代で引き受けちゃったんだね」

富岡「そうですね」

水島「それは凄いですよ」

富岡「はい」

執行「う～～ん…」

水島「なるほど。はい、有難うございます、では、執行さん」

執行「はい。本当に議論は尽きないですけどねえ、もう三島先生っていうのは、あまりに巨大であって、色々どの部分を切り取ってもね、何処までも議論するし、反対者も多い、また賛同者も多い。だけど、１００周年、生誕１００年の今年、僕は、三島先生と縁があった人間として、一番重要で皆さんに知って欲しいことは、やっぱり三島先生が何故、義拳をやらなきゃならなかったかということの根本で、これは僕が１２回に渡る文学論をやっているね、その文学論の中で一番、そこに向っていく文学論の中で考えたんですが、やっぱり、日本人が失っているもの、それを取り戻す為に自分が死ぬってことですよ」

水島「うん」

執行「日本人が失っているものっていうのは、当時、やっぱり天皇も勿論、ありますけど、天皇陛下に対する本当の尊敬の念もありますけど、もっと元と言うと、日本人が奪われた神話ですよ。この神話の心。神話を信じる心。神話が生活の中に降りてくる心。そういうものを、失ったことを最も憂いていたんです。それを釈迦空ですね。折口信夫ですか、折口信夫さんもそうですね。そういう歌もあります。

だから、そここのところに、三島由紀夫の中心があったと僕は信じているので、三島由紀夫さんが議論を超越してね、本当にあれは日本最大の文学者であることは当然ですが、それを引っ提げて、やっぱり、あれだけ論理的、計画的に自分の命を国に捧げ、その時代ですよ。我々に向けて死んだんだと思っていますから。

あの時は昭和ですね。昭和の時代、戦後を生きる我々に向けて、自分の命を捧げて訴えた事、それを神話にして、新しい神話ですよ。だから僕は新しい神話というのを、三島先生の三島文学を読むことによって、我々の心の中に呼び覚まさないといけない時代が来ているんだっていうのが、今年、特に思っている。この本を書いた唯一の理由ですよ。

その神話に、三島先生が死んだことを神話に、日本の本当に新しい神話に気づいていく為の材料と言うのかな、三島先生が実際に語ったことで、材料になるような文学論を全部、網羅したということです。だから皆さんに是非、お願いしたいのはそういうことです」

水島「はい。有難うございます。では浅野さん」

浅野「はい。じゃあ、簡潔に。今、政府に望みたいことは、もう、たった一つしか無いんですけど、不敬罪を復活して欲しいと。もう、これだけですね。それから美的、『文化防衛論』の中から、私が一番、大切なことを言っていると思っているところを朗読して終わりにしたいと思います」

水島「はい」

浅野「『みやびを中心とした衛星的な美的原理、幽玄、花、わび、さびなどを成立せしめたが、この独創的な新生の文化を生む母胎こそ、高貴で月並みなみやびの文化であり、文化の反独創性の極、古典主義の極致の秘庫が天皇なのであった』はい。ここです」

水島「なるほど」

浅野「これに尽きるとしております」

水島「はい、有難うございます。じゃあ、宮崎さん」

宮崎「はい、一言。十代の話が出たので、三島の十代の進言が一つあるんですよ」

水島「うん」

宮崎「『虚栄心 - - - 一昔前まで日本にこのような卑しい文字はなかった。私は、それをアメリカ語だと考えている』と」

水島「なるほど」

宮崎「はい」

水島「素晴らしい」

宮崎「最後の一言」

水島「はい」

宮崎「はい。あと１週間で憂国忌です」

水島「はい」

宮崎「第五十五回憂国忌」

水島「はい」

宮崎「今年は神道の修祓式、祭主は執行先生。それで追悼講演は勿論、富岡さんにもやって戴くと、水島社長にもやって戴くということになっておりますので、皆さん、どうぞ、１１月２５日午後２時、星稜会館大ホールです。以上でした」

水島「はい。是非、皆さん、お集り戴ければと思います。やっぱり、もう一回、しっかり三島由紀夫って何だったんだろう、あの三島の義拳、義拳というか、あれは何だったんだろう。もう一回、本当に考えて行く必要があると思いますね。特に若い人に来て戴きたいので、お知り合いを誘って来て戴ければと思います。はい。

今日は、ちょっと、きつい言い方ですけど『生誕１００年 現代日本にとって三島由紀夫とは何だったか？』ということで、皆さんとお話しさせて戴きました。今日は皆さん、有難うございました」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****